

広大科研

15

13610625

0130485021

ドイツ語・日本語の3項動詞における 格と語順の実証的・理論的研究

研究課題番号 13610625

平成13年度～平成14年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書

平成15年7月

研究代表者 ヨシタ ヒデアキ 吉田 光 演

(広島大学総合科学部教授)

広島大学図書

0130485021





目次

はしがき	1
研究発表報告（平成13年度～14年度）	2
1. ドイツ語の語順に関するパラメタの考察	5
1.0. 1. はじめに	5
1.0. 2. 原理とパラメタ理論におけるパラメタの位置づけ	5
1.1. 1. 具体例：Xバー構造	7
1.1. 2. 線形順序の違い：主要部パラメタ	9
1.1. 3. 主要部と格付与のパラメタ	13
1.2. 機能範疇と移動	15
1.3. オペレータ移動：顕在統語部門と論理形式(LF)	17
1.4. 言語的普遍を求めて — 再び主要部パラメタについて —	19
1.5. 多重補部 — 3項動詞の問題	23
1.6. まとめ	26
2. 日本語・ドイツ語の3項動詞の格と語順の考察	28
2.0. 序論	28
2.1. 3項動詞の統語構造について	29
2.1.1. Xバー構造と主題役割の階層性	29
2.1.2. LarsonのVPシェル分析と英語の授与動詞	32
2.2. 英語の与格交替の分析 — 2つの構造	37
2.3. ドイツ語・日本語の3項述語の統語構造	42
2.3.1. 3項述語とVPシェル構造	42
2.3.2. ドイツ語の3項述語構文の格パターン	44
2.3.3. ドイツ語の与格・対格の語順について	53
2.4. 日本語の3項動詞の格パターン	56
2.5. 語順制約の問題点	59
2.6. 結論にかえて	61
参考文献	63

はしがき

この報告書は、平成13年度～14年度に交付を受けた科学研究費補助金（研究課題「ドイツ語・日本語の3項動詞における格と語順の実証的・理論的研究」）によって行った研究成果の報告である。

ドイツ語と日本語の語順は、典型的な自由語順（かきまぜと呼ばれることもある）を示すので、規範的な語順は何かを特定するのは難しい。にもかかわらず、従来の研究では「主格—与格—対格」順序が十分に吟味されずに前提されてきたように思われる。本研究では、この暗黙の前提を疑問に付し、動詞の語彙意味と統語構造の関係を総合的に捉えようとした。その際、両言語が普遍文法においていかなるパラメタ値をとりうるのかについても若干の考察を行った。

過去の研究、とくに英語に関する先行研究は多数あり、諸説分かれている現在、本研究が出した結果はその一部にかかわるにすぎないことは確かである。しかし、英語を見ていただけでは理解できない相違について、ドイツ語と日本語を検討することで踏み込むことができたように思われる。

この間、本研究課題に関して多くの示唆をくださった方々に感謝申し上げます。

平成15年7月

吉田 光演
(広島大学総合科学部)

ドイツ語・日本語の3項動詞における格と語順の実証的・理論的研究
研究課題番号 13610625

平成13年度～平成14年度科学研究費補助金（基盤研究(C)(2)）
研究成果報告書

研究組織

研究代表者：吉田光演（広島大学総合科学部教授）

研究経費（配分額）

（金額単位：千円）

	直接経費	間接経費	合計
平成13年度	800	0	800
平成14年度	600	0	600
総計	1,400	0	1,400

研究発表（平成13年度～14年度）

吉田光演（研究代表者）

著書

2001(平成13) 『現代ドイツ言語学入門』 大修館書店（共著：吉田光演，保阪靖人，岡本順治，野村泰幸，小川暁夫）

編著書

2002 (平成14) *Grammatische Kategorien aus sprachhistorischer und typologischer Perspektive. Akten des 29. Linguisten-Seminars, Kyoto 2001.* JGG. München, iudicium Verlag. (編)

2003 (平成15) 『ドイツ語の統語パラメタを求めて』 日本独文学会研究叢書 019. (日本独文学会，共編：吉田光演・岡本順治)

2003 (平成15) *Probleme des Interface zwischen Syntax, Semantik und Pragmatik. Akten des 30. Linguisten-Seminars, Kyoto 2002.* JGG. München, iudicium Verlag. (編 in press)

学会誌等

2001(平成13) "Scrambling in German and Japanese from a Minimalist Point of View" *Linguistic Analysis* Vol. 30. 1-2. 93-116.

2002(平成14) "Zur lexikalischen Bedeutung der japanischen Partikel *ka*- historisch und komparativ", Yoshida, M.(JGG) (ed.) *Grammatische Kategorien aus sprachhistorischer und typologischer Perspektive. Akten des 29. Linguisten-Seminars, Kyoto 2001*, 220-236.

2002(平成14) 「ドイツ語中間構文のアスペクトと項構造」, *Festschrift für Toshio Ohtaki* (金沢大学独文研究室報 17), 135-150.

2002(平成14) "Zur lexikalischen Bedeutung der japanischen Partikel *ka*- historisch und komparativ", Yoshida, M.(JGG) (ed.) *Grammatische Kategorien aus sprachhistorischer und typologischer Perspektive.*

2003(平成15) 「ドイツ語の語順に関するパラメタ再考」, 吉田光演・岡本順治 (編) 『ドイツ語の統語パラメタを求めて』 (日本独文学会研究叢書 019), 5-19.

- 2003(平成 15) "Externe Argumente und nicht-nominativische Subjekte im Deutschen und Japanischen ", Yoshida, M.(JGG) (ed.) *Probleme des Interface zwischen Syntax, Semantik und Pragmatik. Akten des 30. Linguisten-Seminars, Kyoto 2002*, 76-92.

口頭発表

- 2001(平成 13) Lexikalischen Bedeutung der japanischen Partikel *ka*, 29. Linguisten-Seminars, Kyoto 2001 (日本独文学会語学ゼミナール, 京都)
- 2002(平成 14) 「ドイツ語と日本語の 3 項動詞の格パターンと語順」(広島言語文化談話会, 広島女学院大学)
- 2002(平成 14) "Zur Wortstellung und Argumentstruktur bei dreiwertigen Verben im Deutschen und Japanischen", FU Berlin Workshop
„Valenzerweiterung – Valenzreduktion im Japanischen und im Deutschen” (ベルリン自由大学)
- 2002(平成 14) 「ドイツ語の語順に関するパラメタをめぐって」 2002 年春季日本独文学会シンポジウム『ドイツ語の統語パラメタを求めて — 多様性を生み出す原理』における報告 (立教大学)
- 2002(平成 14) Externe Argumente und nicht-nominativische Subjekte im Deutschen und Japanischen, 30. Linguisten- Seminars, Kyoto 2001 (日本独文学会語学ゼミナール, 京都)
- 2003(平成 15) 「ドイツ語・日本語の "quirky" subject について」(広島言語文化談話会, 広島女学院大学)

1. ドイツ語の語順に関するパラメタの考察

1. 0. 1. はじめに¹⁾

本章は、生成文法理論の発展形としての「原理とパラメタ理論(Principles and Parameter Approach; P&P)」及び Minimalist Program (MP)の枠組みにおいて自然言語の文構築の普遍原理と統語パラメタの問題について論じ、それに基づいてドイツ語の語順に関するパラメタを設定することを目的とする。また、ドイツ語と日本語の統語パラメタの相違についても触れ、3項動詞の語順の輪郭を記述する。同時に、Kayne (1994)が提案した LCA, 即ち、「全ての言語は SVO 語順で生成される」という線状一致公理(Linear Correspondence Axiom)の問題を批判的に検討することによって、主要部パラメタ(head parameter)の意義を再度確認する。

1. 0. 2. 原理とパラメタ理論におけるパラメタの位置づけ

自然言語を早期に獲得し(どんな言語でも母語としての獲得時期に大きな違いはない)、自在に操ることが人間の特質であるという認識は新しくはない。しかし、「それが一体なぜ可能になるのか」という問題は、言語学は言うまでもなく、哲学や科学にとっても長い間の謎であった。これに対して、生成文法の理論家ノーム・チョムスキーが出した答えは、「言語能力は認知特性のモジュールの一つ」であり、「言語能力はヒトという種に生物学的に組み込まれた生得的能力だ」ということである。即ち、ヒトの脳には言語機能(language faculty)という器官があり、言語機能の初期状態としての普遍文法(Universal Grammar: UG)が言語能力を可能にするのである。この言語機能の存在は神経科学的には未だ証明されていないが、UG の仮定によって言語能力に関する謎が解決し、人間の言語はどれも本質的相違はないという帰結が得られる。他方、世界には多くの言語が存在しており、それらの相違は無視できない。そこで P&P と MP 理論は、個別言語の文法の多様性は UG に内蔵された可変パラメタの値の組み合わせによって生ずるのであり、UG の唯一性とは矛盾しないのだと説明するのである。

¹⁾ 本稿は 2002 年春季日本独文学会シンポジウム『ドイツ語の統語パラメタを求めて — 多様性を生み出す原理』で筆者が行った報告「ドイツ語の語順に関するパラメタをめぐって」及び吉田(2003)に基づいて大幅に加筆修正したものである。シンポジウム共同発表者である稲葉治郎氏、岡本順治氏、田中雅敏氏、野村泰幸氏、保坂靖人氏から貴重なコメントを頂いた。ここに謝意を記しておきたい。

(1) 普遍文法 $UG \{P_1, P_2, \dots, P_n\} \rightarrow$ パラメタ値の固定 \rightarrow 個別言語の文法 G_1, G_2, \dots, G_n
{ドイツ語, 英語, 日本語・・・}

生後間もない幼児の初期文法は UG 自体であり、どの言語にも対応できるようになっている。 UG には未設定パラメタ $\{P_1, P_2, \dots, P_n\}$ がある。周囲からの言語刺激の入力によってパラメタ設定プログラムが作動すれば、それらの値が定まり、多様な文法が展開する。かくして $P\&P$ 理論は、プラトンの問題、即ち、不完全で乏しい経験からどのように豊かな知識を導くかという問題(説明的妥当性と記述的妥当性の間の矛盾)が解決できると考え、英語や日本語、ドイツ語など個別言語にかかわる統語的パラメタを次々と分析・考案していった。

しかしこのアプローチも決して万能ではない。パラメタを増やすと、文法の記述力は高まるが、(当たり前の話だが)説明力は落ちてしまう。 $+/-$ の2値変数でさえ、8個あれば理論上 $2^8=256$ 種類の文法が派生する(16個なら 65536種)。その結果、可能な文法は、指数関数的に増大し、それらの間の選択は困難になる。それゆえパラメタの数は厳しく制限する必要が生じる(岡本(2003)参照)。

さらに質的問題もある。パラメタは UG の普遍性を突き崩すような大域的なものではなく、局所的で知覚によって接近可能(accessible)でなくてはならない。概念・意味の認知インターフェースでは個別言語による差異は微小であると考えられる。ソシュールが述べたように、言語間変異の多くは音と意味の結合の恣意性、即ち辞書に記載された語彙項目の個癖性に起因する。この意味でパラメタの変域は可能な限りレキシコン(語彙・範疇クラス)の音韻・形態特性に限定されるべきである。名詞、動詞、形容詞、前置詞等の語彙範疇(lexical category)は具体意味を担う実質範疇(substantive category)であり、(概念の切り取り方は言語によって異なるが)音声や形態を除けば言語間で極端な違いはない。たとえば「食べる」行為を表す語はどの言語でも動詞範疇で、動作主と主題の2項関係を表すだろう。他方、指示的概念的意味とは違って、否定・相(aspect)・時制・量化・発話行為等の抽象的意味にかかわる機能範疇(functional category; 限定詞, 屈折辞, 補文標識等)は、言語によって形態統語的相違が大きい。そこで、パラメタに関して次の(2)の制約を仮定する。問題は、(2)が経験的にどこまで保持されるかである。

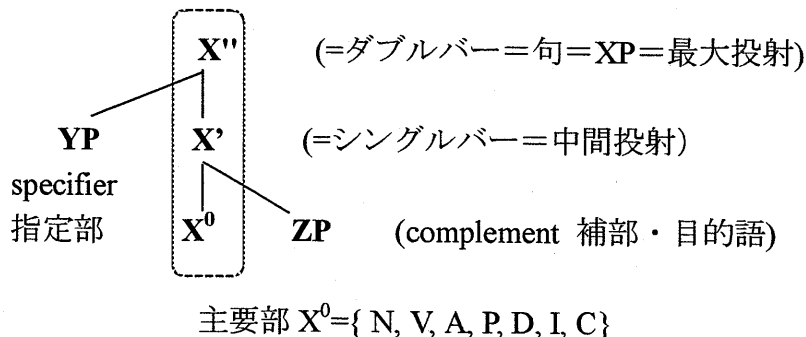
(2) UG のパラメタはレキシコン内の機能範疇クラスに限定される。²⁾

²⁾ 福井(2001)は(2)をパラメタではなく「(核)語彙に関する言語間変異」の問題として捉える。彼はさらに「パラメタは要素の左右関係に関するものに限られる」(福井 2001:45)と述べるが、この考えは本論の立場と基本的に同じである。

1. 1. 1. 具体例：Xバー構造

具体例を見ていく。統語論のユニットをなす句の構築の普遍フォーマットは以下の(3)のようなXバー構造($X^n \rightarrow \dots X^{n-1} \dots$)である。例として(4)を挙げる。

(3) Xバー構造のシェーマ



ここで変数であるXは、名詞N、動詞V、形容詞A、前置詞Pなどの統語範疇を代理している。心的辞書の中に登録されている単語は、形態的に最小である主要部 X^0 に相当し、統語派生の最初の段階で統語部門に導入されることになる (MP理論ではこれを Numeration と呼ぶ)。主要部 X^0 は、語の下位範疇化特性に基づいて n 個の補部を選択して中間投射 X' を作る (自動詞なら、補部はゼロ、他動詞は補部 1 個、3項動詞は補部 2 個というように)。その次に、(主語など)句を限定し、投射を完結する機能をもつ指定部を選択することによって最大範疇 $X'' (=XP$ 句) に拡大し、投射が完了する。今度は新たな主要部 Y がこの XP を補部にとって、Y が投射していく。即ち、どの句もその中心には主要部が存在する内心構造 (endocentric structure) を備えている。このシステムは、主要部—中間投射—最大投射という 3 段階の拡張を想定する。ただし、主要部によって選択されない任意の副詞のような付加部 (adjunct) は、投射レベルを変えず、中間部のシングルバーの反復として表される。以下、Xバーシェーマによる派生の例を示す：

(4) a) $VP \rightarrow DP V'$ b) $V' \rightarrow DP V^0$ (DP= determiner phrase)

例： $[VP [DP Daniel] [V' [DP das Buch] [V liest]]]$ (動詞句)
 Daniel the book read

c) $DP \rightarrow DP [D' D^0 NP]$ d) $NP \rightarrow [N' AP [N' N^0 DP]]$ (AP は付加部)

e) $AP \rightarrow PP [A' A^0]$ f) $PP \rightarrow [P' P^0 DP]$

例： $[DP [DP Chomsky] [D' [D -s] [NP Buch]]]$ (限定詞句 DP)

[DP [D' [D ein] [NP Buch [DP der Linguistik]]]]

a book of the linguistics

g) IP → DP [I' I⁰ VP] (IP= inflectional phrase= 文)

h) CP → (XP) [C' C⁰ IP] (CP= complementizer phrase= 節)

例: [IP John [I' [I has] [VP read the book]]]

|_____| (agreement)

(Ich weiss nicht) [CP [C' [C ob] [IP Maria [VP die CD gekauft] [I hat]]]] (節)

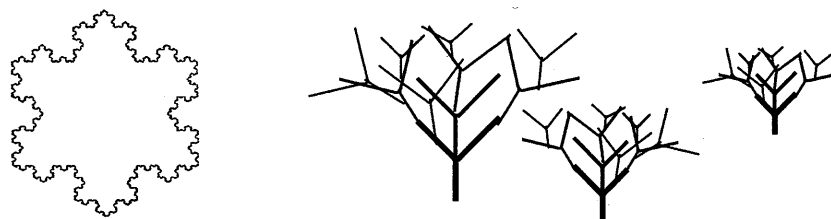
(I don't know) whether Maria the CD bought has

動詞句 VP, 形容詞句 AP, 名詞句 NP (現在では限定詞句 DP), 前置詞句 PP といった個々の句の実現は, 主要部の語彙特性によって定まっている。従って, 統語論で改めて特別に記述する必要はなくなった。しかしながら, 標準理論段階の句構造文法では, 文 S は名詞句 NP と動詞句 VP から成り立っていて (S → NP VP), 文の主要部に当たる要素はなかった (S の主要部がない, 即ち外心構造であった)。しかし, 動詞形態を分解し, 文主語との関係を捉え返すと, 時制の存在が主語を保証することが分かる (不定詞句では空主語=PRO しか基本的に現れない)。また, 主語と動詞の人称変化語尾の間に一義的な対応関係が成立する (指定部と主要部の一致関係)。従って, 文の主要部は屈折辞であると考えることができる (=4g)。さらに, かつて補文 (S' → Comp S) と分析された節 (clause) においても, glauben (=believe) タイプの動詞は dass 節 (=that 節) の補部を選択し, fragen (=ask) タイプの動詞は疑問文である ob 節 (=whether 節) を選択するというように, 節の主要部の特性 (主張タイプか, 疑問タイプか) を決定するのは dass, ob など節 CP の主要部である補文標識 (complementizer) である。従って, (4g), (4h) のように, 時制 (tense; T)・人称変化要素 (agreement; AGR) を含む屈折辞 I⁰ (=inflection) を文の主要部と分析し, 補文標識 C⁰ を節の主要部と捉えることによって, 文構造そのものは複雑で抽象的なものにはなったが, 文も節も, 従って全ての統語構造が同一の X バーフォーマットによって生成されるようになった (Chomsky 1986)。即ち, X バー構造の一般化によって, 文を構成するすべての構造が相同的・階層的に構築されるようになったのである。

要するに, 人間の心の中での文の組み立ては一見非常に複雑に見えるが, 実際には単純な式型 (ひな型) の反復繰り返しに還元できるのであり, これによって言語の計算の複雑性はドラスティックに軽減される。さらに言えば, 言語のこの自己相似性は自然界の法則にかなった原理でもある。それは複雑系におけるフラクタル構造と類似しているといえる。以下にその例を示す。

(5) フラクタル構造の例

直線___の中央3分の1を三角に折ると___の形になる。同様に各々の直線を繰り返して三角に折って、これらを組み合わせていくと最終的に雪の結晶に似た図形が出来上がる。あるいは、多くの枝が複雑に絡み合った樹木を手で描くのは労力を要するが、コンピュータグラフィックスでは単純なY字型を少しずつ角度を変えてつなぎ合わせることで簡単に木の模様を描くことが可能になる：



このように一見無秩序（カオス）に見える複雑な形状が単純な図式の繰り返しと埋め込み（入れ子構造）に基づく幾何学構造をもっているのがフラクタルである。これを言語に当てはめて、構造派生の単位をXバー式型と見立てるならば、複雑系の基礎になるフラクタル構造と句構造との平衡性が得られる。自然界には単純な図式の反復から複雑な構造を作る経済原理が働いているのである。

1. 1. 2. 線形順序の違い：主要部パラメタ

では、言語間の構造上の相違はどのように表せばいいのか？Xバー構造には変数部分が2つある。一つはVやNなど主要部Xに入る範疇ラベルである。語の範疇ラベルは辞書で指定されているので、主要部変数はパラメタと連動しない。ある言語で語彙範疇の一部が現れない、たとえば形容詞範疇Aが存在せず、名詞か動詞で表されるといったこともありうる。あるいは、日本語の形容動詞のように一つのカテゴリーの中にさらに細分化された範疇を認めなくてはならないケースも出てくる（「ナ形容詞」と「イ形容詞」の違い）。また、日本語では主語と動詞の一致を要求するような屈折語尾はないので、基本的には屈折辞Iは時制辞T(=tense)に還元できる。それ以外にも、日本語の名詞表現では"the"や"der", "ein"に相当する限定詞は要求されないため、限定詞範疇Dを設定する必要性は基本的にはない。そのような個別言語的な揺れは、心的辞書の語彙項目で特殊化されれば済む問題であり、Xバー構造それ自体の意義に影響を与えるものではない。

もう一つの変数要素は主要部と結合する補部や指定部の線形順序である。日本語や英語、ドイツ語など個別言語の文を生成するための語順に関していうと、言

語間の相違については X バー構造それ自体はなにも規定していない。そこで、線形語順について、(6)のような語順パラメタが仮定できる。まず主語，動詞，目的語を例にとれば，(7)のように6通りの語順が考えられるだろう。

- (6) (i) 主要部(H)が補部(Compl)に先行する(H-Compl)。 [±主要部先行型]
 (ii) 指定部(Spec)が中間投射 X'に先行する(Spec-X')。 [±指定部先行型]
- (7) a. Spec [H Compl] (SVO) b. Spec [Compl H] (SOV)
 c. [H Compl] Spec (VOS) d. [Compl H] Spec (OVS)
 e. H Spec Compl (VSO) f. Compl Spec H (OSV)

実際の言語のパターンでは、主語が先行する(7a)の SVO と(7b)の SOV 語順が圧倒的に多い。世界の言語 402 例を検討した Tomlin の調査によれば、SVO/ SOV 両方で 87%であり、SOV 語順が 45%で、42%の SVO よりも若干多いとされている (Baker(2001, 2003 参照))。つまり、言語は圧倒的に[+指定部先行型]の値をとるのである。SVO, SOV に次いで(7e)の VSO パターンがサポテック語、ウェールズ語など、9%程度見られるが、それ以外の(7c),(7d),(7f)は極小である (合計で 4%)。 (7f)の OSV 言語はほとんど確認されておらず、主語が後続する(7c),(7d)型言語も非常に少ない。確かに、カリブ語族のヒシカリアナ語 (ブラジル熱帯雨林地域の少数言語) は OVS 語順の言語であり、マダガスカル島のマラガシュ語やマヤ語族のツォツィル語は VOS 言語といわれている(cf. Pearson 2000)。

- (8) Nanolotra ny dite ny vahiny ny zazavavy. V -DO- IO -SU (マラガシュ語)
 Past. offer the tea the guest the girl (=少女は客にお茶を出した)

しかし、(8)において後置されている主語は、実際には既知の話題要素であって話題化によって主語が右に移動したと考えることもできる³⁾。また、節 CP の指定部に移動する疑問詞は、マラガシュ語でも左側に来るのが一般的である。もしも指定部が右に位置するのであれば、WH 要素も右端に来るはずである。しかし、マ

³⁾ あるいは、主語を焦点要素として解釈することもできるかもしれない。

次の(i)の文では受益者が話題化(A バー移動)で右側に移動しているが、動詞の右側の主語が先行する形で再帰形を束縛している。つまり右端以外の[...]の中では他の SVO, VSO タイプと同様に主語が目的語より卓越する構造になっている。(i)では VSO 言語と同様に動詞の左方移動が関与していると考えられる (cf. Pearson (2000))。

(i) [Namonoan' ny vehivavy₁ tena₁] ny zanany. (マラガシュ語)
 Past.kill the woman(Sub) self the child.₃
 (=その女性₁が彼女の子のために自分₁を殺した)

ラガシュ語でも WH 句は左側に移動するので、CP 指定部は左端ということになり、(7c),(7d)のような語順の存在を疑う証拠になる。たとえ、ある言語で主語が右側に生じる傾向があるとしても、それが基底構造から（話題化や焦点化など）何らかの理由で主語が右端に移動することによって派生する可能性は排除されない。この限りで、指定部は原理的に左端に位置すると推測できる⁴⁾。また、Xバー構造では主要部と補部は常に隣接するので、(7e),(7f)は基底構造の形としては許されない。実際、(7f)の OSV 型言語はほとんど観察されていないし、(7e)の VSO 型はウェールズ語、ブルトン語など若干存在するが、これらの VSO 語順は基底構造ではなく、動詞の主要部移動(head movement)が関与していると考えられる。たとえばウェールズ語では、平叙文で(9a)のように定動詞 V が先頭に現れるが、助動詞が現れる複合時制では、(9b)のように助動詞が文頭に現れ、動詞の不定詞形は SVO 語順の動詞位置に生じる。従って、(9a)の定動詞前置は主要部先行タイプの Xバー構造で作られた(9b)の SVO 語順から移動によって派生されたものであると分析できる。この動詞移動にもまた何らかのパラメタが関与している。

- (9) a. Gwelodd₁ Sion t₁ draig. V-移動 (VSO) (ウェールズ語)
 saw Sion dragon (=Sion が竜を見た)
- b. [CP Gwnaeth Sion [VP weld draig]]. 助動詞 +SVO
 did Sion see dragon

従って、Xバー構造に課せられる次の(10)のような主要部パラメタが、自然言語の基本語順を決定すると考えることができる。

(10) 主要部パラメタ (P1)

主要部は (i)先行(+head-initial)
 または (ii)後続(-head-initial)である

主要部先行

ON	OFF
----	-----

(10)は世界の言語の基本語順の 80%以上を網羅する。また、主要部パラメタは、主語・目的語・動詞だけでなく、他の範疇の語順も決定する。語順に関してはグ

⁴⁾ Baker (2001, 2003)で展開されているように、モホーク語やワルピリ語のように、動詞形態の中に目的語代名詞や主語代名詞が形態的に組み込まれる抱合(incorporation)を起こす言語では、見かけ上の主語や目的語は付加部にすぎず、その位置は固定的ではない。従って、この場合には、基本語順の決定は表層語順だけからでは困難である。この多総合性パラメタ(polysynthetic parameter)についてはここでは問題にしない(Baker 2001, 2003を参照)。

リーンバーグなど言語類型論の研究がある（「もしもある言語に後置詞があれば、その言語は OV 語順である」等の含意）。この種の含意(implication)による一般化は主要部パラメタによって原理的に説明できる。ある言語が日本語のように X バー構造に照らして、一貫して主要部後続 YP-X⁰ ならば、OV、名詞句-後置詞 (NP-P⁰)、文-接続詞(IP-C⁰)という語順が生じるのは当然であり、逆に英語のように一貫して主要部先行型ならば、日本語とは逆の語順になるのだから。

それだけではない。一つの言語においても範疇によって主要部パラメタの値が逆転することもある。たとえば、ドイツ語では動詞句や形容詞句の基底語順は主要部後続型だが、名詞句や前置詞句では英語に近い先行型である (Haider 1993)。

(11) a. Der Professort ist [seiner Frau [A treu]]. (A: 主要部後続)

b. der [[N Student] [DP der Physik]][PP [P aus] Bonn] (N, P: 主要部先行)

これは語彙範疇を V/N の自然素性に分解することによって説明できる。ドイツ語では動詞素性+V をもつ動詞([+V,-N])、形容詞([+V,+N])は主要部後続型だが、動詞素性をもたない-V の名詞([-V,+N])と前置詞([-V,-N])は主要部先行型になる。一方、日本語は範疇素性の区別なしに一貫して主要部後続パラメタ値をとる。よって、次のように、ドイツ語やオランダ語のタイプと日本語を区別する主要部パラメタの下位分類パラメタが設定できるだろう。

(12) ドイツ語(オランダ語など)に関わる主要部パラメタ (P2)

(i) [+V]素性の V, A は主要部後続, (ii) [-V]素性の N, P は主要部先行

(V=[+V, -N], A=[+V, +N] N=[-V, +N], P= [-N, -V])

UG の不変部としての X バー構造が言語の普遍的階層構造を駆動し、その中の可変部としての主要部パラメタが個別言語の文法変異を可能にする。この普遍-特殊の関係はいわば生物学的にも動機づけられていると考えられる。たとえば、人間は、ウイルスなどの病原体の侵入から身体を守るために生体内で 100 億種類もの抗体を作り出している。しかし、人の身体を構成する遺伝子の数は約 3 万個にすぎず、当然ながら抗体タンパク質の合成に使える遺伝子はその中のごく一部に限られている。100 億と 3 万(以下)という数合わせのディレンマをどのように解決すればよいか?これが免疫学において GOD (=generation of diversity : 多様性発現)ミステリーと言われた問題であった。この問題は次のような経済原理によって解決された。免疫系で重要な役割を果たしている抗体分子は種類は異なっていて

もどれも Y 字形をしている。ただし、Y 字形の上部先端部分は可変的微細構造になっていて、柔軟に変形することによって多種多様な抗原と結合できるようになっている。このような不変領域 (Y 字型) と可変領域の組み合わせによって少ない遺伝子の数でも多様な免疫構造を作り出せるようになっているという (利根川 2001)。この経済的關係はまさに X バー構造と主要部パラメタの關係と同じであり、言語が生物学的基盤に基づいていることを示唆しているといえよう。

1. 1. 3. 主要部と格付与のパラメタ

次に、主要部パラメタと名詞句の格付与の關係を見よう。語彙範疇の V, A, N, P にはどれも下位範疇化タイプとして補部をとるものがある。

- (13) a. die Stadt zerstören (Acc-V) einer Sache bewusst (Gen-A)
 die Frau des Professors (N-Gen) mit dem Computer (P-Dat)
 b. destroy the city (V-Acc) aware of something (A-of)
 the wife of the professor (N-of) with the computer (P-Acc/oblique)

英語と比べると、ドイツ語では V, A, N, P が名詞句に格付与できるが、英語では格付与できるのは動詞と前置詞だけで、形容詞・名詞は不可能である (of + 名詞句の形で前置詞 of の助けが必要)。この特性の相違もパラメタ化されていると考えられる。名詞句の格に関与する素性は N 素性である。格付与子になる範疇は、英語では動詞と前置詞に含まれる [-N] 素性だけであるが、ドイツ語では [+/-N] の両方である。ドイツ語や日本語は、(14) の後者の値をとる。

- (14) (P3) 格付与する主要部は (i) {V, P} または (ii) {V, P, N, A} である。
 (このパラメタは {V, P} ⊂ {V, P, N, A} のように部分集合の關係である)

補部の範疇特性と語順にも関連性がある。名詞句は格を照合されねばならず、格は規範的な補部位置において統語的に照合される。従って、名詞句補部の基底生成位置はパラメタ P1, P2, P3 に従う。

- (15) a. weil Harry [NP Chemie] [V studiert] (NP_{Acc} ← V⁰ [+V, -N])
 because Harry chemistry studies
 b. *weil Harry [studiert] [Chemie] (*V-NP: P2 に違反)
 └──×──┐
 └──┐
 ↑

このことは、格付与に関する一義的な方向性を仮定しておけば (例えばある言語

で動詞が、同時に右方向にも左方向にも格を付与することはないとすれば), P1 (及びその下位変数としての P2) と P3 から自動的に導かれることである。

ただし、格付与子(Case assigner)と格を付与される (あるいは照合される) 名詞句との間の隣接性 (距離) については、パラメタ化されている可能性がある。

(16) a. John often [VP drinks coffee]. b. *John [VP drinks often coffee].

(17) a. weil Hans oft Kaffee trinkt b. weil Hans [VP Kaffee oft trinkt]

英語では、副詞は主要部の動詞と補部目的語の間に介在することはできない (=16b))。これは、格付与子と名詞句の関係が隣接関係によって定義されていると考えればよい (MP 理論では、これとは異なる説明がなされるが、記述的にはこれで問題ない)。一方、ドイツ語では、(17b)のように格付与の方向性 (左側) さえ保持すれば、名詞句("Kaffee")と動詞("trinkt")との間に副詞が介入しても格付与 (格照合) は問題なく成立する。日本語もドイツ語と同じタイプである。

(18) P4 (格付与の関係のパラメタ)

格を受け取る名詞句は、格付与子と隣接関係になくてもならない。

(英語は YES, ドイツ語, 日本語は NO)

(18)のパラメタは、自由語順を許すかどうかに関わる要因の一つである。

P3, P4 は格を持たねばならない名詞句に関与するパラメタである。他方、格付与の必要がない前置詞句や節補部は規範的な補部位置になくてもよい。

(19) a. [PP auf seine Frau] [A0 stolz] (本来の補部位置)

b. stolz [PP auf seine Frau] (P2 に違反) (Ramers 2000)

proud on his wife (=proud of his wife)

(20) a. *?? weil ich [CP dass Peter krank ist][V glaube] (本来の補部位置)

b. weil ich [V glaube] [CP dass Peter krank ist] (P2 に違反)

because I think that Peter sick is

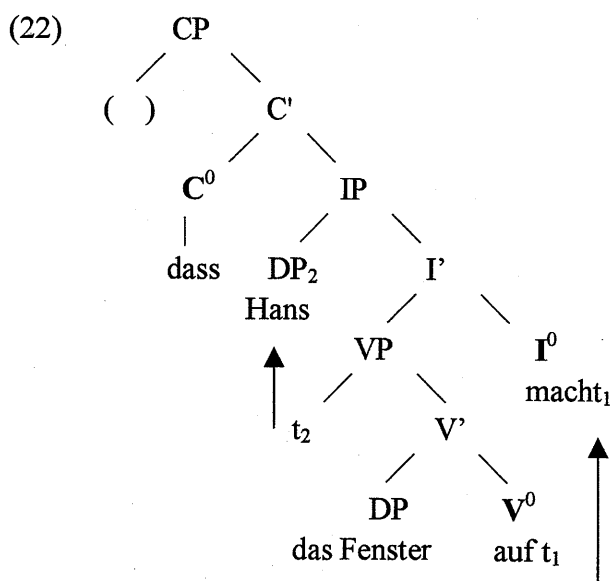
(21) weil ich t₁ [V glaube] [CP dass Peter krank ist]₁ (Extraposition: 外置)

形容詞に選択された前置詞句 PP は本来の補部位置にあってもよいし、反対側の位置にあってもよい (=19b))。また、動詞に選択された節補部は、主要部後続型の (20a)ではなく、(20b)の主要部先行型の方がむしろ適格である。後域に位置する補文は(21)のように基底構造である SOV 語順から節を右端に移動 (外置) すること

によって派生するのか、または(20b)のように、節補部は最初から主要部先行型として生成されるのか？厳密な主要部後続言語である日本語では問題にならないが、ドイツ語では範疇タイプによって主要部パラメタ値が変化するという事も十分に考えられる。さらに、外置やかきませのように、句・節を文境界の右や左端に移動させる個別言語的操作をレキシコンとは別レベルのパラメタとして設定できるかどうか問題になってくる。もし、(21)のタイプを外置移動として分析するなら、この種の外置は意味解釈に影響しない限りにおいて音韻パラメタとして定式化される可能性がある（つまり統語構造上はあくまで SOV タイプを保持している）。しかし、本論ではスペースの問題もあるので、これ以上論述しない。

1. 2. 機能範疇と移動

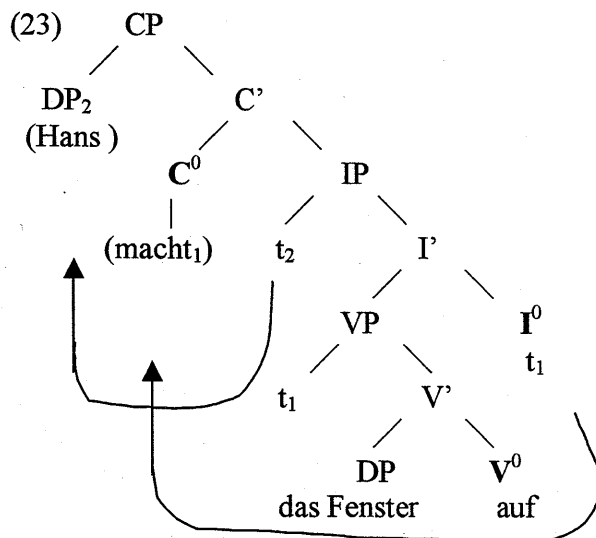
以上のパラメタを使うことによって、ドイツ語の定形後置文を生成することができる。動詞句内主語仮説に従って、文主語は基底構造では動詞句の中に生成されると考える。主要部後続パラメタによって、ドイツ語の動詞句(VP)はまず SOV 語順の形で生成される。主要部である屈折辞 I^0 は、時制と人称(AGR)の機能素性を担い、補部である VP の後ろに位置する。この位置に定動詞が移動すると仮定しよう。文 IP を補部にとるものが補文標識 C で、次の(22)ではCの位置に dass(=that)が挿入されている。ドイツ語では、従属接続詞が C 位置に実現する節 CP は SOV 語順になるが、これは X バー構造に主要部後続パラメタ値が適用された結果であり、移動の少ない経済的派生であると考えられる。



(22)では、分離動詞"aufmacht"の定形部分 macht が動詞位置 V から屈折辞位置 I に

主要部移動し、主語"Hans"は VP の指定部から文 IP の指定部位置に上昇する(ただしこの仮定は必須というわけではない。Yoshida 2003 参照)。

では、定形第 2 位文(=V2)はどうだろうか？ 次の(23)では、文 IP の投射までは(22)の派生のステップと同じである。しかし、C が投射する時点では C 位置に語彙が挿入されずに空のみである (C[] IP)。ここで、C に最も近い主要部である I 位置にある定動詞 macht が C 位置に移動する。次に、主語や副詞などの句が CP 指定部(前域)に移動する。これで動詞第 2 位が得られる。



日本語や英語では C 位置は必須ではない(=25)。つまり、文は IP 投射まででよい。しかし、ドイツ語では C 位置が語彙的に空のみだと、非文になってしまう(=24b)。ドイツ語では平叙文であっても文は必ず節 CP まで投射する。

- (24) a. [CP weil [IP das Wetter heute schön ist]] (CP まで投射)
 b. * [CP () [IP das Wetter heute schön ist]] (IP のままでは不可)
- (25) a. [[IP 今日の天気が良い][c(こと)] (C はなくてもよい)
 b. [IP The weather is nice today]

ただし、ドイツ語でも言語獲得の初期段階では、非文(24b)のような SOV パターンもよく観察される。子供が動詞の屈折形を正しく獲得するに従って、次第に V2 語順が現れる。では動詞移動の統語的トリガーはいったい何なのか？ここではさしあたり次の C 範疇パラメタを仮定しておこう。

(26) (P5) C 範疇パラメタ (ドイツ語など V2 言語に關与するパラメタ)
 時制節の C 位置は語彙的に埋められねばならない。

(27) [CP (ist) [IP das Wetter heute schön ist]]

↑ _____ | (P5 によって定動詞 I が繰り上がる)

(28) [CP Heute ist [IP das Wetter heute schön ist]]

↑ _____ | (話題化によって句が前域に移動)

(29) [CP [Which CD] did [IP Gisbert did buy which CD yesterday]]? (=V2)

(26)の P5 はゲルマン系言語に特有の動詞第 2 位を引き起こすトリガーである⁵⁾。英語では P5 の値は基本的に NO だが、場所句倒置(locative inversion)や主節の WH 疑問の場合などでは、例外的に動詞第 2 位(residual V/2)が生じる(=29)。

1. 3. オペレータ移動: 顕在統語部門と論理形式 (LF)

自然言語の特徴の一つとして意味的に關連する 2 つの要素が離れた位置に現れるという転位現象(dislocation)がある。生成文法理論はこれを顕在統語部門(overt syntax)での移動と分析するが、移動には動機づけが必要である。V2 の場合は、V 移動を駆動する C パラメタと話題化を仮定した。この話題化(topicalization)は英語や日本語でも随意的に適用される移動操作である。

(30) a. [CP This book₁ I really like t₁].

b. [CP この本₁ は、太郎が t₁ 好きだ]。

c. [CP Dieses Buch₁ mag ich t₁ sehr].

(30)の話題はどれも動詞の補部位置から節 CP の指定部に移動したと考えられる。この移動を引き起こすのは、C の TOPIC 素性である。同様に WH(疑問詞)移動も

⁵⁾ しかし、このパラメタについては疑義がないわけではない。MP 理論に基づけば、文の生成において最初から C 位置が確保されているわけではなく、C 位置が必要ならば、意味解釈との関係において動機づけがなければならない。WH 疑問文では C 位置は [+WH] 素性の場所として正当化されるが、平叙文の場合には [-WH] 素性あるいは [+TOPIC] 素性が關与するのか定かではない (もしこのような素性が關与するなら、なぜ英語や日本語で常に CP が投射しなくてよいのかという疑問が生じる)。また、V2 文は範疇的に CP と同じではなく、IP のステータスをもつという分析も可能である (Stechow & Sternefeld 1988)。この場合は、I は主要部先行型の値をとる：

(28') [IP Heute [I ist] [VP das Wetter heute schön ist]]

CP 指定部への移動である。

- (31) a. [_{CP} Was₁ hat [_{IP} Hans t₁ gelesen]]?
b. [_{CP} [_{IP} 一郎が何を read したのです] [_C か]]?
c. [_{CP} 何を₁ [_{IP} 一郎が t₁ read したのです] [_C か [+wh]]] (LF 意味解釈表示)

英語やドイツ語では、WH 句は義務的に一つだけは文頭に移動するが、日本語では明示的な WH 移動は必要ない。疑問詞は文末助詞「か」との関連で解釈される。つまり、日本語では WH 句は非顕在統語部門(covert syntax)としての論理形式(LF: logical form)で節 CP の指定部に移動すると考えられる。(32)のように、話題も疑問詞も意味論的には変項を束縛する演算子であり、顕在的統語部門か目に見えない LF 部門のいずれかにおいて、文全体を作用域にとる位置に移動する。演算子移動に関しては、(35)の C 素性のパラメタを設定しておく。

- (32) [_{CP} Topic₁ /WH₁ C[_{TOP}/WH] [_{IP} ... t₁ ...]]

(Topic/WH である要素 x に関して x は○○の性質をもつ)

- (33) 例 : [_{CP} Chomskys Buch₁ C[_{TOP}] hat [_{IP} Hans t₁ gelesen]]

→ For x₁ (x₁=a="Chomskys Buch" _{topic}) it is the case that [READ (Hans, x₁)]

- (34) 例 : [_{CP} was₁ C[_{WH}] hat [_{IP} Hans t₁ gelesen]] (=31a)

→ For which x₁ (THING(x₁)) is it the case that [READ (Hans, x₁)]?

- (35) (P6) C の[topic/wh]素性は、(i) 顕在統語部門か、または(ii)非顕在的 LF レベルで、同じ素性をもつ演算子句を誘引移動する。

ドイツ語・英語は P6 に対し(i)の値をとる(統語部門での明示的移動)⁶。WH 移動では、それ以外にスラブ系言語のように全ての WH 句が顕在的に節の左端に移動するケースがある(ここでは検討しない)。日本語・中国語などは(ii)の値になるが、日本語の話題の「は」句を明示的移動と分析するなら、[TOP]素性に関し

⁶ しかし、前域(節 CP 指定部)が平叙文で常に話題であるとは限らない。"es", "man"などの強勢アクセント付加が不可能な主語や"da", "dann"などの接続副詞が文頭に来ることは普通だが、これらは非焦点要素であるが、(predication の対象になるという意味での) aboutness 条件に適合するものではない。Fanselow (2003)によれば、それらは情報伝達構造における話題/焦点素性によって移動するものではなく、中域の中の最上位を占める句であり、前域を埋める移動の最短距離の位置にある要素として移動する。なお、筆者(吉田)は"da", "dann", "gestern", "heute"などの接続副詞、時の副詞などは移動によって前域に来るのではなく、CP 指定部に直接マージ(挿入)されている可能性があると考え(動詞の項構造に影響しないので移動痕跡を仮定する必要がない)。

て日本語は(i)の値をとると考えられる(話題卓越言語のパラメタ)。しかし話題化の場合は移動だけではなく、基底生成の話題化も仮定する必要がある(田中(2003)参照)：

(36) [CP 魚は_[+TOP] [IP 鯛がうまい] C_[+TOP]]

1. 4. 言語的普遍を求めて –再び主要部パラメタについて–

以上、ドイツ語統語論にかかわるパラメタを見てきた。この他に問題となるパラメタとしては、多総合性パラメタ、能格性(ergativity)パラメタ(対格型か、能格型か)、pro-drop パラメタ(代名詞主語脱落の有無)、主語位置の配置に関するパラメタ(VP内主語が動詞句内部にとどまりうるか、それとも義務的にIP指定部に移動するか)などのパラメタが考えられる(cf. Baker 2001)。この中でドイツ語に肯定的に関与するのは、主語位置のパラメタである。pro-drop パラメタはイタリア語("Capisce" (=he/she) understands))のように代名詞主語を表現しなくてもよいというもので、ドイツ語は pro-drop 言語とはいえないので、この値はマイナスである("(ieh) Habe schon gelesen.", "(das) Habe ich schon gemacht"のようなトピック省略は可能である)。一方、英語と比べると、ドイツ語の主語は文の左端(IP指定部)に移動する必要性は高くない(IP指定部への移動はIのEPP素性="extended projection principle"と呼ばれている)。次の(37)の例のように、主語はIP左端に現れてもよいし、動詞句内主語位置にとどまってもよい。そこで、(38)のような動詞句内主語位置残留の可能性をパラメタとして設定しておく(EPP素性の強弱で表せばよいので、機能範疇の語彙特性に還元されるが。cf. Baker 2001)。

(37) a. weil [IP niemand damals den Aufsatz verstehen konnte]

because nobody at that time the paper understand could

b. weil [damals den Aufsatz [VP niemand verstehen konnte]]

(38) P7: 主語は動詞句内にとどまることができる。即ち、文IPの指定部はEPP素性をもたない(主語が文先端部に移動する必要がない)。

さて、パラメタ全体について考慮すべき問題もある。(2)で「UGのパラメタはレキシコン内の機能範疇に限定される」と定式化した。機能範疇クラスへのパラメタ制限は、言語間の現象的相違を野放図にパラメタのレベルで記述しなすという方法論的循環への歯止めとして機能するものである。この(2)についてはP5, P6のC範疇, P7のI素性に関して当てはまるが、P1, P2, P3, P4は語彙範疇に関わるので、(2)の条件は成立しない。P3, P4の格付与については、MP理論では「統

率(government)」の概念を放棄し、機能範疇(I, 他動詞の対格を照合する v)の主要部-指定部関係における格照合を仮定するので、機能範疇パラメタに言及する道は残されている(Chomsky 1998, 1999)。残る P1, P2 の主要部パラメタは X バー構造と語彙範疇に関わるので、機能範疇とは関係しない。しかし、先行-後続という線形語順は語彙範疇の素性[$\pm V$, $\pm N$]に依存しており、語彙範疇の情報自体はレキシコンから読み取れる。たとえば、英語の[$\pm V$, $\pm N$]素性はレキシコンにおいてすべて「主要部先行」(P1)の値をとり、日本語の[$\pm V$, $\pm N$]素性はすべて「主要部後続」の値をとる。ドイツ語は、[+V]素性では「主要部後続」、[-V]素性は「主要部先行」という分裂タイプである(P2)。これらはレキシコン全体に適用される制約である。主辞駆動句構造文法(HPSG)など、語彙素性の情報に依存した形の文法を提唱する他の理論においても、語彙項目の冗長性を回避するグローバルな語彙規則(lexical rule)が設定されている(名詞 noun で可算 +COUNT であれば、[NUM pl]を付加できるという「複数名詞語彙規則」など)。レキシコンの役割を重視する限りにおいて、このような規定はどのみち必要とされる制約である。したがって、(2)からの逸脱(機能範疇 vs. 語彙範疇)はミニマルであり、パラメタの局所性自体は保持されていると言ってもよいだろう。

既に述べたように、個別言語の文法を記述するためにパラメタを増やすと、記述の精度は高まるが、説明力は落ちる。パラメタなしで変異が説明できれば、その方が望ましい。この観点から MP 理論は余分な理論的道具を削ぎ落とし、文法の最適な計算システムの設計を追究している。1.1.で見た X バー構造も、レキシコンに予め記載された範疇素性や形式素性のほかにバーレベルなど余分な概念を含んでおり、包括性条件に違反するという理由で破棄された。その結果、MP 理論では X バー構造の代わりに最小句構造理論(bare phrase structure)が提案された(Chomsky 1995a)。それと同時に、語順変異にかかわる主要部パラメタの意義も揺らいでいる。この原理的問題を検討してみたい。

一つは、Chomsky (1998)が示唆するように、語順の問題を PF(=phonetic form)、即ち音韻レベルに移し替え、これを句構造理論から除外するアプローチである。たとえば統語論では動詞句のマージ(併合構築)は{V, NP}の集合で表され、順序関係は定義されない。従って、{read, a book}, {ein Buch, liest}は同様に適格な VP であり、SVO, SOV 語順のいずれかで出力される。線形順序はスペルアウト(音声書き出し)後の PF レベルで形成され、それは言語計算の中心問題ではない。しかし、このような変更は重大な理論的帰結をもたらす。従来も生成文法理論は文法現象の抽象化によって普遍文法の解明に向けて大胆な理論の枠組みの転換を提案してきたが、統語論からの語順の捨象は適切な抽象化とはいえない。もしも線形順序

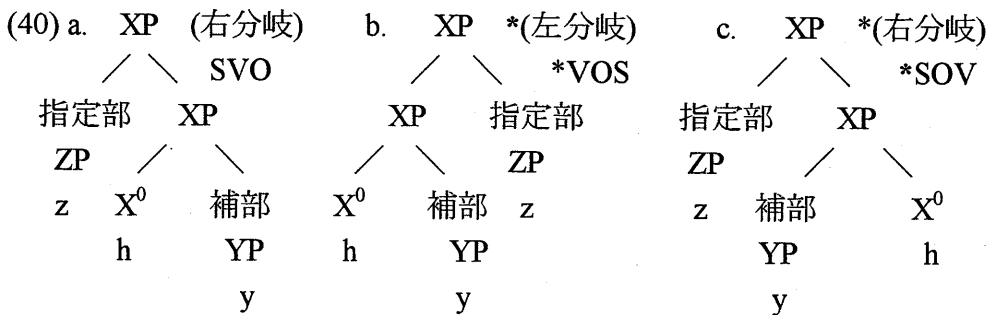
が問題ではないとすれば、WH 移動を含む様々な句の移動自体も統語論プロパーの問題ではなく、発音・運用の問題として捨象することも原理的に可能だからである。しかし、自然言語（とその構造）が基本的に音声言語として時間的順序関係において産出・知覚される以上、順序関係を無視するわけにはいかない。

もう一つのアプローチは、すべての言語の基本語順は同じであると仮定し、主要部パラメタの2値性を別の形で定義する方法である。この立場から言語の基底語順はすべて SVO であると主張したものが Kayne (1994) の LCA(線状一致公理) である。LCA の詳しい解説は省略するが、次の仮定から成り立っている。⁷⁾

(39) LCA(linear correspondence axiom)の条件

- 1) 終端記号(語)の順序は非終端要素間の非対称的 c 統御によって決まる。
- 2) 時間軸に沿って先行する要素が後続要素を一意的に c 統御する((40a))。
- 3) 句構造は常に二項分岐の形を示し、右枝分かれになる((40a,c))。

帰結：言語はすべて指定部-主要部-補部(主要部先行: SVO)順序になる。



Kayne (1994)によれば、指定部は付加構造 ([xp YP [xp]])の形をなす。(40a)の構造では、左端の ZP が後続の XP, X⁰, YP を非対称的に c 統御し、2 番目の主要部の X⁰ は後続する YP を非対称的に c 統御している（逆に、YP は X⁰ を c 統御してはいない）。(40b)では、後方の ZP が左にある X⁰ と YP を非対称的に c 統御し、(40c)では左の補部 YP は後方の X⁰ を c 統御するが、同時に X⁰ も補部 YP を c 統御しているため、どちらも(37)の条件(2)に一致しない。結局、(40a)の SVO 語順の構造(下向き右枝分かれ)だけが(39)を満たすということになる。LCA が導く(40a)の句構造が自然言語において普遍的であるとする、主要部パラメタは不要になり、すべての言語は主要部先行型として基底生成されることになる。従って、SOV など

⁷⁾ LCA: d(A)は T の線形順序である。ここで A は、X_i が Y_j を非対称的に c 統御するような順序対 <X_i, Y_j> の集合、T は終端要素の集合を表わす。d(A)は、非終端要素が支配する終端要素の集合を表わす(先行する要素が後続要素を c 統御する)。

の言語の語順は、基底の(40a)の SVO 構造から統語的な移動操作によって二次的に派生されるという。

この LCA の立場からドイツ語を見ると、1.3.の PP や節 CP の語順は逆の説明を受けることになる。前置詞や節は格の照合を受ける必要がないので、基底語順のまま右側にとどまる。しかし、SOV 言語では名詞句は格照合を受けるために、動詞句内から左側の機能範疇領域に移動する。たとえば従来の分析では、(41c)では名詞句 *ein Buch über Chomsky* の中から前置詞句 *über Chomsky* だけが後域に置かれる(外置)。逆に LCA 分析では、名詞句 *ein Buch* の方が左側に移動したと分析される。英語では、目的語は顕在的統語部門では左方向には移動しないが、ドイツ語・日本語では統語部門で明示的・顕在的に移動することになる。

(41) a. weil Hans I⁰ [VP [V glaubt] [CP dass Peter krank ist]] (V-CP 主要部先行)

b. weil Hans gestern I⁰ [NP das Buch]_i v⁰ [VP las t₁] (OV = 目的語移動)

↑ _____

c. weil Hans [NP ein Buch]_i [VP liest [t₁ über Chomsky]] (目的語移動)

because Hans a book reads about Chomsky

d. 一郎は昨日、本を₁ v⁰ [VP 読んだ t₁] (目的語移動)

↑ _____

LCA が言語的普遍の議論に一步踏み込んだことは明らかである。また、ドイツ語の統語現象の一部は LCA でエレガントに説明できる。しかし欠陥もある。言語がすべて指定部—主要部—補部の語順なら、ドイツ語の初期値も SVO であるはずだが、幼児の言語データは SOV 語順がほとんどである。LCA によれば、SVO から SOV への変化は(41b)のように目的語の左方移動によるが、移動は必然的動機が必要である。しかし、個別言語パラメタを獲得していない幼児には移動の動機は見えない。それ故 LCA では幼児のドイツ語の SOV 語順は説明できない。確かに幼児の発話時点で既に目的語を左に引き寄せる機能範疇パラメタは設定済みであると分析すれば、この疑問が解消すると考えることも理論上可能である(cf. 岡本(2003))。しかし、そうすると(ドイツ語、日本語では VO が具現することがないので)、LCA は反証不可能な仮説になる(逆を仮定すればよい。「言語はすべて SOV 基底語順だが、英語やフランス語では獲得段階で既に一定のパラメタによって常に V-O が具現する」と主張するのと同じである)。日本語やドイツ語のように格形態が豊かな言語では格助詞が名詞句に付加することによって既に機能的照合関係が成立している。それ故に、さらに見えない抽象的機能範疇を立てて

名詞句の顕在的移動を仮定することは直感に反した分析といわねばならない。

さらに、SOV 言語では目的語だけでなく、下位範疇化された副詞類や二次述語などの左方移動を設定する必要がある(Haider 2000)。ここで、副詞の位置を正しく導くためには、数多くの移動を仮定する必要があり、非常に不経済的な派生ステップが必要になってしまう。一方、SVO 言語では副詞の移動は必要ないので、SOV 言語だけに副詞移動を仮定することは理論的に不整合であろう。

(42) a. *Sie haben [_{VP} gelebt genügsam].

They have lived modestly

b. Sie haben [genügsam₁ [_{VP} gelebt t₁]] (副詞の左方移動?)

↑ _____

(43) a. *Das Fleisch wurde [_{VP} serviert roh].

b. Das Fleisch wurde roh₁ [_{VP} serviert t₁]. (Haider 2000 の例)

the meat was raw served

逆に Haider (2001), Fukui & Takano (2000)のように、(40c)タイプの SOV 構造の方が基底語順としては SVO よりも基本的だという主張もある⁸⁾。日本語のように厳密な SOV 言語を LCA によって分析するには、名詞句や副詞類をすべて左側に移動しなければならない。しかし、WH 移動も動詞移動もない日本語でこの種の移動を仮定するのはかなりの無理がある。逆に SOV が言語の基本語順ならば、日本語には基本的に移動が必要ないことが自然に説明できる⁹⁾。

LCA と Haider の説のどちらをとるにせよ、経験的・理論的問題が生じる。従って現段階では、日本語やドイツ語の SOV 語順を経験的に記述する上でも、また、経済性の観点から理論的に説明する上でも、主要部パラメタは X バー構造とともに必要であると仮定するほうが得策であろう。

1. 5. 多重補部 — 3 項動詞の問題

4 章における LCA の問題は、二重目的語構文のように補部が 2 つある場合の分析にも影響を与える。二項枝分かれ(binary branching ; これは情報計算の上で効

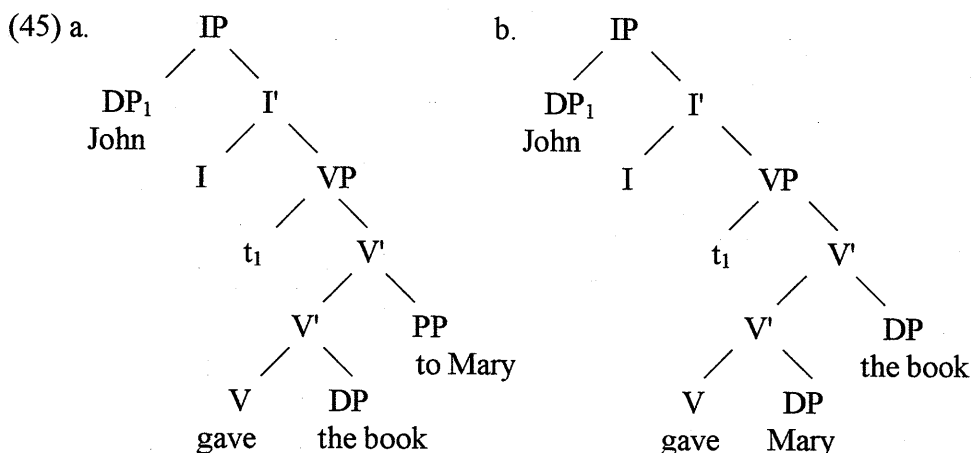
⁸⁾ Haider (2000:)は次の枝分かれ制約(BC)を提案し、主要部後続型の SOV タイプを基本構造と仮定している。ただし機能範疇投射については主要部先行型を認めている: "Branching Constraint (BC): Projection-internal branching nodes on the (extended) projection line follow their sister node."

⁹⁾ 要素の単純な線形順序の問題なら、VO と OV の派生コストはどちらも五分五分である。四則演算の変異である中置法 5+9, ポーランド表記 +(5,9), 逆ポーランド表記 (5,9)+と同じく表記の相違でしかない(コンピュータの演算としては、演算に付される項をすべてスタックしておいて最後に演算操作を行う逆ポーランド方式=即ち SOV 語順がもっとも効率的とされる)。

率的である)を仮定すれば、英語の"give"タイプの動詞が関与する文の構造は、望ましくない左枝分かれを許してしまう：

(44) a. John gave the picture to Mary.

b. John gave Mary the picture.



英語の give タイプ構文は、(44a)のような与格構文と、(44b)のような二重目的語構文がある。格形態としての与格(dative)をもつドイツ語の観点からすると、"to"+NPのような前置詞句を与格(dative)と呼ぶのは奇妙である(ドイツ語では to+NP に対応する an, zu +NP のような前置詞句もあるのだからなおさらである)。さらに、(44b)の動詞に隣接する受益者項"Mary"を直接目的語と呼ぶのも問題がある(意味的直接性ではなく、表層の文法機能においては問題ないが)。それはともかく、このままの形では(45a),(45b)のように、2つの補部は VP 内部において右側にある補部が左側の補部を非対称的に c 統御する形となり、LCA に違反する。経験的にも次の例で分るように、これらの構造では束縛関係を説明できない。以下の例では左側の名詞句が束縛代名詞を認可し、束縛解釈を可能にする。また、左側の否定表現(nobody)が否定極性表現を認可する(=48a)。しかし、(45a),(45b)の構造を仮定すると、その逆の事態が予測される。実際には(47b),(48b)は排除されてしまう(cf. Haider 1990: 20ff)：

(46)a. They sent everybody_i a package [PP to his_i home address].

↑束縛代名詞 (c 統御)

b. weil sie jedem_i ein Paket an seine_i Privatadresse geschickt haben

(=彼らはみんな_iに小包を自分たち_iの自宅へ発送した)

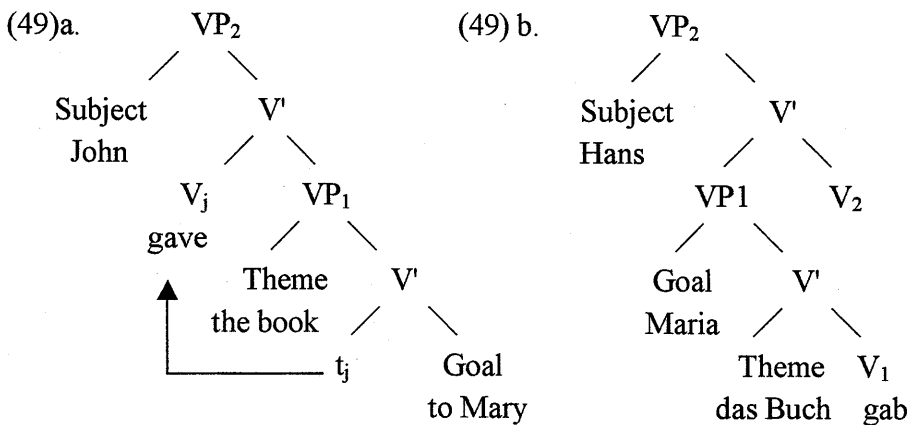
(47) a. I showed every friend₁ of mine [DP his₁ photograph].

b. *I showed its₁ trainer [DP every lion₁].

(48) a. I gave nobody [DP anything]. (否定辞—否定極性表現)

b. *I gave anybody [DP nothing]. (*否定極性表現—否定辞)

つまり、(45a,b)のような枝分かれ構造は許されない。これについてはLCAも正しい予測を導くが、左側の要素が右側の要素をc統御する構造は、Larson (1988)が仮定するような単一補部仮説とVPシェルによっても導き出すことができる：



単一補部仮説では、一つの句はその投射内部に一つの補部しか選択できない。すると、英語のようなVOタイプでは[theme V goal]のような動詞句がまず作られ、次に主語（使役者）の項を取り込むために、元の動詞句の上にVPシェルを重ねて、VPシェルの主要部に動詞を移動させる（主要部移動）。他方、ドイツ語の場合にはVPシェルを仮定したとしても、最初からOV構造であるがゆえに、動詞主要部は後ろに位置するので、V1-V2連鎖は最初から隣接している、従って、明示的な動詞移動の必要はない (vacuous movement; 即ち、より経済的派生である)。

いずれにせよ、(49)の構造は(46)-(48)の経験的対比を説明できる点で優れている。重要な点は、(49a)(49b)は、KayneのLCAの主張の半分は支持し、残りの半分は退けているという点である。即ち、(i) 先行する左側の要素が後続する要素をc統御する上向き左枝分かれの階層構造になっていること（この点はLCAの精神と同じ）、(ii) しかし、主要部と補部の関係は先行型でも後続型でも等価であることである（むしろOVタイプのほうが経済的である）。この点からも、Haider (2000)のBCの仮説は裏付けられる。英語とドイツ語の対比としては、3項動詞におけ

る項の順序関係がドイツ語では比較的自由であることが挙げられる（この問題については後述する）：

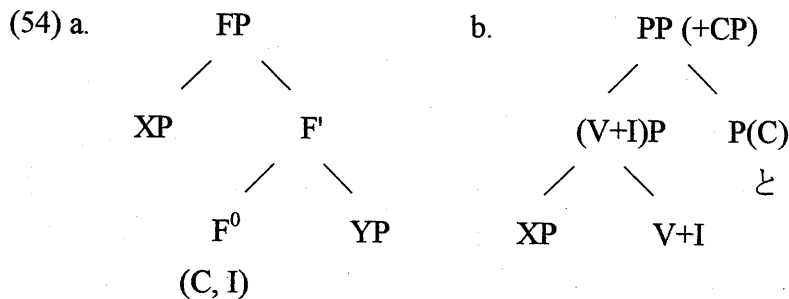
- (50) a. John gave the picture to Mary. b. *John gave to Mary the picture.
 (51) a. John gave Mary the picture. b. *John gave the picture Mary.
 (52) a. Gestern gab Hans Maria das Bild. b. Gestern gab Hans das Bild Maria.

1. 6. まとめ

最後に、ドイツ語にかかわる統語パラメタのステータスを再度見よう。

典型的な主要部後続型言語の日本語と違って、ドイツ語の語順は英語にも似ていることは確かである。確かに、P1, P3, P4, P7のパラメタではドイツ語と日本語は同じ値をもつ。しかし、(12)のP2の議論においてドイツ語のNP, PPは英語と同じく主要部先行型であることは既に見た。機能範疇Cはドイツ語では主要部先行型であり、主要部後続型の日本語と鋭く対立する。実際、WH移動や話題化操作ではドイツ語と英語はむしろ共通点が多い（左方向への明示的移動）。P2, P5, P6の部分でドイツ語は英語タイプと類似している。現段階では一つの仮説にすぎないが、LCAの弱いバージョンとして次の仮説を立てることができるかもしれない。

(53) $F \gg -F!$ （機能範疇Fは主要部先行型(主要部-補部)として実現せよ。）



(53)は機能範疇の線形順序についてはUGにおいて固定されていることを述べたものである。(53)によって、SOV語順のドイツ語でもC位置は先行型になる(=(54a))。一方、日本語の「か」や「と」は純粋な機能範疇ではなく語彙範疇N, Pとの混在であるため(53)が適用されない(=(54b))。屈折辞Iに関して、ドイツ語のIはV+Iの混合範疇であるか、または(53)によって、右端のI位置が認可されず

に I の左方移動(V2)が引き起こされると分析できる。もし後者が正しければ(26)の P5 は不要になるだろう。

以上の議論の総括として、考察したパラメタを以下にまとめておく。

(55) ドイツ語に関する統語パラメタ (一部のみ)

P1: 主要部パラメタ: 主要部は(ii)後続(一head-initial)である。

P2: ドイツ語(オランダ語など)に関わる主要部パラメタ (P2)

(i) [+V]素性の V, A は主要部後続, (ii) [-V]素性の N, P は主要部先行型である。

P3: 格付与する主要部は {V, P, N, A}である。

P4: 格を受け取る名詞句は、格付与子と隣接関係になくてもよい。

P5: C 範疇パラメタ (ドイツ語など V2 言語に関するパラメタ)

時制節の C 位置は語彙的に埋められねばならない。

P6: C の[topic/wh]素性は、顕在統語部門で同じ素性をもつ演算子句を誘引する。

P7: 主語が動詞句内にとどまることができる。即ち、文 IP の指定部は EPP 素性をもたない(主語が文先端部に移動する必要がない)。

2. 日本語・ドイツ語の3項動詞の格と語順の考察

2. 0. 序論

本章では、英語も視野に入れて日本語・ドイツ語の3項動詞の項の格・語順の問題について考察する。ここで3項動詞(three-place predicates; dreistellige Prädikate)と呼ぶ動詞は、次のような構文タイプに現れる動詞を指すものとする：

- (1) a. 主語名詞句(SU)+ 名詞句・間接目的語(IO)+ 名詞句・直接目的語(DO)
 与格(dative) 対格(accusative)
 ("Hans hat Maria das Buch gegeben." 「一郎が美紀に本をあげた」)
(1) b. 主語名詞句(SU)+ 名詞句・直接目的語(DO)+ 前置詞句目的語(PP)
 ("Hans hat ein Paket an Maria gesandt." 「一郎が小包を美紀(宛て)に送った」)

(1)の区別は暫定的で、語順はさしあたり問わない。(1)bは、(in, auf= on, über =over, unter= under など) 場所の前置詞を入れ替えることによって多種多様な位置変化を表すが、ここでは授与行為と関係する比較的中立的な空間意味を示す前置詞だけに限定する。たとえば目標を示す zu (=to)や an (=at, to), auf (=on)である。日本語の格助詞(case particle)としては「が」「を」「に」「の」が挙げられる。また、起点の「から」、方向の「へ」、到達範囲の「まで」、手段・場所の「で」、随伴の「と」など、名詞句を伴って具体的意味を表示する助詞を後置詞(postposition)と捉えることも問題ないだろう。しかし、それ以外で何が格助詞で、何が前置詞に相当する後置詞なのかは自明ではない。たとえば(1)の例文が示すように、「に」は一方で格助詞、他方(目標を示す意味で)後置詞機能をもっているとも考えられる。従って、(1a, 1b)の分類は当面の作業仮説である。

(1)の2つのタイプとの関連で興味深いのは、対応する英語の3項動詞では次の2つの構文に分かれる(与格交替= dative alternation: DA) ことである：

- (2) a. 主語(SU)+ 間接目的語 (IO)+ 直接目的語 (DO) (二重目的語構文)
 b. 主語(SU)+ 直接目的語 (DO)+ to /for NP (PP) (与格構文)

(2a)(2b)の相違はドイツ語や日本語ではどのような形で現れるのか?あるいは英語の(2)の相違は見かけだけのものでしかないのか?また、フランス語やイタリア語の3項動詞は、(動詞位置への接語代名詞の移動を除けば)基本的に(2b)の名詞目的語+前置詞句タイプしか持っていない。このことは言語類型的にどのように

説明できるのか（格形態の問題）？そもそも単純動詞の項構造が1項～3項を基本としており，4，5，6項と拡大していかないという事実はどのような制約に基づくのだろうか（統語的制約，意味的制約，認知上の制約）？この章では日本語・ドイツ語の3項動詞を含む項の表れについて次の問題を設定する：

- (3) a. 動詞の項は3項パターンまでで，4項動詞や5項動詞はなぜ存在しないのか？（「売る」などは「XがYにZをW円で売る」というように4項動詞だと言えるが，代価の部分は随意項であり，必須項は3個で十分である。）
- b. 英語の(2)の与格交替は両言語でどのような対応関係になるのか？
- c. 2つの言語の3項の格パターンと語順はどのように制御されているのか？

2. 1. 3項動詞の統語構造について

既に1.5節において3項動詞の補部構造を概観したが，ここでは再度(3a)の言語普遍的観点から問題を再検討してみよう。

2. 1. 1. Xバー構造と主題役割の階層性

Xバー式型は，レキシコンから任意の数と種類の項（指定部と補部）を統語構造に写像する。しかし，個々の語彙の投射がいかなる補部を選択するかは，主要部の語彙特性に左右される。従ってレキシコンの語彙項目の項構造がXバー構造のどの位置と対応するかということが問題になる。動詞句(=VP)を例にとれば，主要部Vが補部の θ 役割（意味役割）を決定するが，この意味役割の間にはデフォルト値として一定の序列関係（意味役割階層）がある。

- (4)a. agent>benefactive>goal/experiencer>theme>location (Bresnan & Kanerva (1989))
- b. Agent > experiencer > goal/ location > theme (Grimshaw (1990))
- c. 動作主 (使役) > 経験者 > 主題(対象) > 目標/場所 > (存在項)

意味役割の階層に関しては(4a),(4b)のように若干のずれがある。言語間の相違は階層上位ではあまり見られないが，下位に進むにつれて，格の相違や語順の評価の問題が生じ，どれを上位としてどれを下位と見るかによって，揺れが出てくる(cf. 吉田他 (2001))。ここでは暫定的に(4c)の階層（一般的傾向）を仮定する。なお，(4c)で最下位の「存在項」は出現・生成・消失に関わる対象・達成目的語を表わし，既に叙述の対象として存在が前提されている主題（対象）と区別する(cf. 加賀(2001))。日本語で「XにYがある」という語順になるのは場所>存在項の階層を示している。英語でも"There walked into the room a unicorn」のように，目標>

存在項の場合には通常は *there* 構文と共起しない動詞が現れる ("**There walked a unicorn into the room*"は非文。この場合は対象>目標)。加賀 (2001)は、従来の主題理論を批判し、動作主>場所>存在者という階層を提起し、場所は「着点・所有者・受け手・被動作主」を含み、存在者は主題・結果を含むと主張する。本稿では主題役割理論を詳しく検討する余裕はないが、(4c)の階層は語彙分解意味論による論理表示によって正当化できると考える。いずれにせよ(4)で共通することは、この階層が統語構造に直接的に反映するという次のような仮定である：

(5) 主題関係 (意味役割の写像) の階層性 :

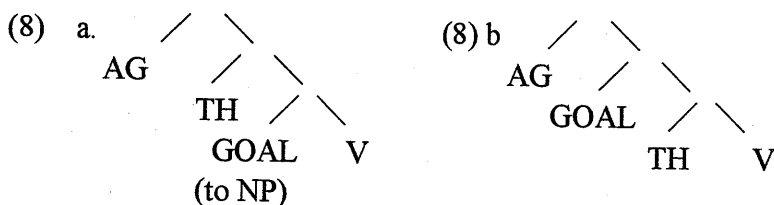
主題役割の階層において、項のXの主題役割が別の項Yよりも上位にあるならば、D構造 (基底構造) でXはYをc統御する (=句構造で上位にある)。
(cf. Larson (1988), Grimshaw (1990))

動作主を例にとると、動作主が一番高い階層にあるので、動詞が<動作主(AG), 対象(TH)>のような項構造をもてば、(4c)に従って動作主が構造的に上位に生成され、<経験者(EXP), 対象(TH)>のような項構造をもつときは、経験者が上位に生成される。樹状図としては(6a)と(6b)のような構造関係になり、具体例としては(7a),(7b)のような文になる (ここでは格の問題は考慮しない)。



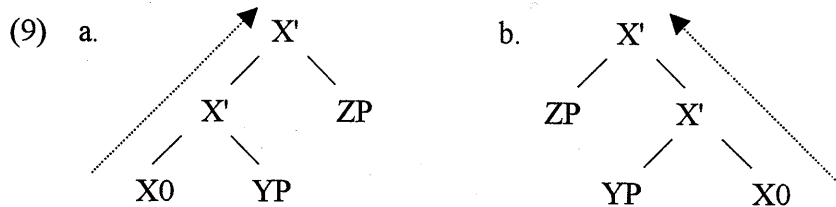
- (7) a. *dass* [_{VP} [*wir* AG] [_V [*das Buch* TH] [_V *lesen*]]] (=我々がその本を読む)
 b. *dass* [_{VP} [*uns* EXP] [_V [*das Buch* TH] [_V *gefällt*]]] (=我々にその本が気に入る)

項を3個とる授与動詞の場合には、動作主>対象>目標の階層が予測される((8a))。しかし、英語の与格構文のように、動作主>目標>対象の語順パターンも実際には観察される((8b))。



SVO 語順と SOV 語順の場合に、枝分かれ構造が異なっている可能性があれば、

補部の語順の逆転も十分考えられる。問題は、補部が複数個ある場合の可能なXバー構造は何かということである。1章でも考察したように、自然言語の計算体系として3つの枝分かれを許す平板構造を除外し、2項分岐 (binary branching)だけを認めることとする (2つの要素を構成素としてまとめる併合(Merge)操作 $\{\{\alpha, \beta\}, \alpha\}$ が2項関係であるとすればこのことは自明である)。そうすれば、補部が2個あるとき、主要部先端言語 (SVO)では(9a)のように上向き右枝分かれ、主要部末尾(SOV)では(9b)のように上向き左枝分かれの構造を生み出す：



どちらの構造も、主要部 X0 に隣接した句は主要部と意味的に最も緊密な関係にある補部である。すると、VO, OV 言語は鏡像関係にあり、((V+theme)+goal), (goal+(theme+V))のように項の順序関係が常に逆転することが予測される。実際には、同じく agent > theme > goal (location)の順になっている：

- (10) a. John [V put] [NP a book] [PP on the desk].
 b. Hans hat [NP ein Buch] [PP auf den Tisch] [V gelegt].
 c. ジョンは [本を] [机に/の上へ] [V 置いた]

VO語順の英語では、theme ("a book")がVに隣接し、次に場所のPPがくるOVのドイツ語では (PP(NP(V)))と逆の順序になるはずだが、順序は英語と同じである (日本語では「に」が与格にも、目標格にも対応し、(10c)の順序はドイツ語ほど厳格ではない)。また、"any"のような否定対極表現は適切な否定辞の領域内で認可されるが、次のような対比がある(Barss & Lasnik (1986) 参照)：

- (11) a. I gave [no one] [anything].
 b. *I gave [anyone] [nothing].

(9a)の上向き右枝分かれ構造では、後続のNP "anything"が与格NPをc統御するが、逆に"no one"は"anything"をc統御できない。それゆえに、誤って(11a)を非文、(11b)を文法的と予測してしまう。(9b)のような左枝分かれ構造では、(11a,b)の相違を正しく予測できる。この問題は、先行詞の認可条件をc統御だけでなく、線

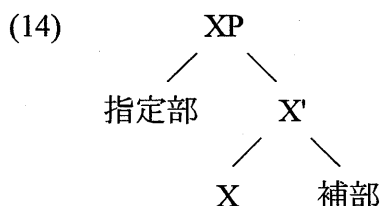
形順序 (c 統御+先行順序) によって定義すれば解決する(Barss & Lasnik(1986))。しかし語順自体は階層関係と直接関係しない概念であり、説明力としては弱い。これらの観察から Xバー式型と語順について次の一般化が得られる。

- (12) (i)統率の方向にかかわらず、主題役割の階層は左から右方向に具現する。
 (ii)統率の方向にかかわらず、左にある要素が右のものを束縛する。
 (iii)それゆえに SVO であろうと、SOV であろうと、Xバー式型は基本的に上向き左枝分かれの構造(=(9b))を持つことが予測される。

2. 1. 2. Larson の VP シェル分析と英語の授与動詞

2項枝分かれを仮定すると、VO語順では(9a)の右枝分かれの階層 Xバー式型しか派生せず、(12)と相容れない。これを解決するものが Larson (1988,1990)の分析である。Larson は(13)の「単一補部仮説」と(14)の Xバー式型を仮定している：

- (13) 単一補部仮説("Single Complement Hypothesis"(=SCH))
 ある最大範疇(句)は、最大限指定部一つと補部一つを持ちうる。

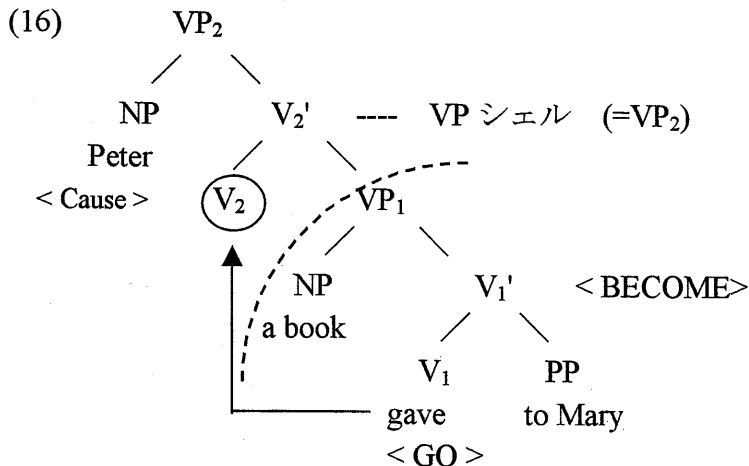


SCHによってXP(たとえばVP)の中に投射できるのは指定部と補部の2項だけなので、3項動詞の場合は一つの項が余ってしまう。しかし、主要部が選択する項はその投射内で飽和されねばならないので、次の補助的原理が必要になる：

- (15) 項具現化の原理(the principle of argument realization)：

α が述語であり、また、 β が α の項であるならば、 β は α が主要部となる投射の内側において実現される(Larson(1988))。

(14)、(15)の原理に基づいて、補部を2つ以上持つ3項動詞の場合には、元のVPの上に空のVP(VP-shell)を貝殻(シェル)のように積み重ね、その後で元の動詞をシェルの主要部位置に繰り上げて、動詞句の拡張(extension)を行う操作が必要になる。つまり、(16)のような与格構文の派生である。



(16') [使役主 (動作主) CAUSE [対象 BECOME BE-AT 目標]]

動詞"give"は前置詞句を補部にとり、目的語(="a book")を VP 指定部に生成する。"a book gave to Mary"のままでは正しい順序ではなく、主語が VP 投射の中で生成できない。そこで SCH と項具現化原理によって、(14)の式型を接木のように加えて、VP₁を補部にとり(音形もθ役割も持たない軽動詞) V₂を生成する。そしてその指定部に主語(動作主=使役主)を挿入する。最後に、元の動詞"give"を上位のV₂位置に繰り上げて、2つの動詞の連鎖を同一の動詞連鎖 gave+V₂とすることによって、項具現化の原理が守られ、各々の項に主題役割が正しく付与される。

この VP シェル分析には次のメリットがある。(i) (14)の単一補部仮説による Xバー式型はそれ自体で上向き左枝分かれ構造になっている。この構造と VP シェルという一見複雑なステップを仮定することによって、主要部先端言語であっても(9b)の2項左枝分かれ構造を正しく導き出すことができ、(12)の一般化に対応しうる。(ii) さらに、VP シェル構造は、動詞の語彙意味論的内容を明示的に反映したものになっている。後者が実は VP シェル分析の最大の利点と思われる。即ち、VP シェルは次のような意味論的な考慮が背景にあると考えられる：

- (17) (i) 他動詞で、動作主項が関与するのは、補部が一つの場合だけである。
 (ii) 補部を2つ取る3項動詞の動作主は、実際には使役主(Causer)であり、意味的には複合的命題を形成する(よってVP シェルの形成)。
 (iii) 元来の動詞句は、移動の意味(対象 GO TO 目標)か、所有の意味(目標 HAVE 対象)に対応する。

[VP₁ X CAUSE [VP₂ Y HAVE Z (or: Z GO-TO Y)]]
 シェル VP =元の命題

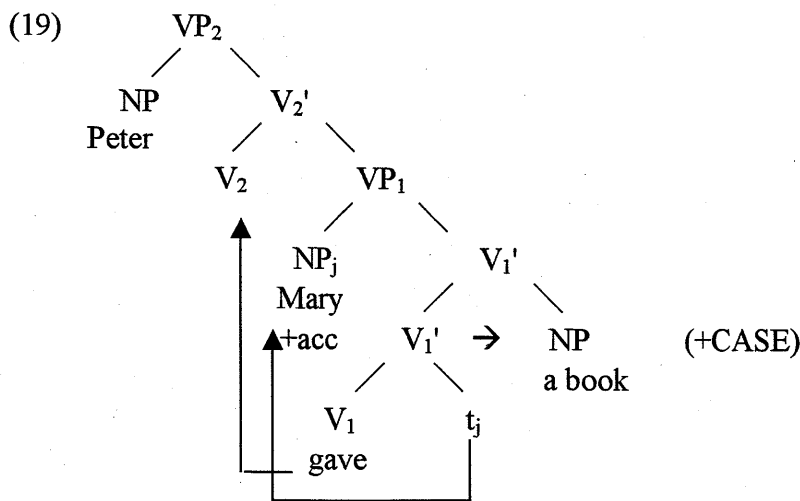
(17)により(16)は(16')の意味表示に対応し、[John CAUSE [a book GO-TO Mary]]と

いう語彙意味表示で表わされる。このような統語構造と語彙意味論的關係の写像關係を仮定することによって、(3a)の問題に対する答えを導き出すことができる。即ち3項動詞の項構造が使役主を含みこむとすれば、複合動詞などの語形成・統語過程が関与しない限りにおいて、それ以上の項構造の拡張は不可能と予測される。項構造の階層性によって最上位にある使役主(動作主)の導入後にさらに他の意味役割を投射する項構造は排除されるからだ。意味的にも、「移動させさせる」という述語は論理的に不可能ではないが(= A CAUSE (B CAUSE (C GO-TO D))), 自然言語の語彙意味論としては異様である。そこで次の一般化を設定する。

(18) 3項動詞の項構造は使役主(Causer)を最上位にとる。(4c)に従って、単純動詞レベルではそれ以上の項構造の拡張は不可能である。((3a)の問題)

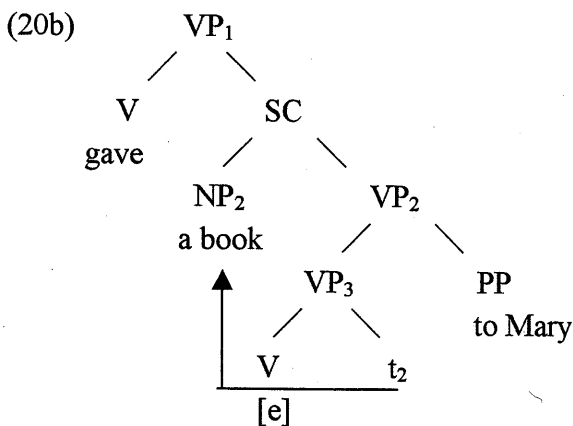
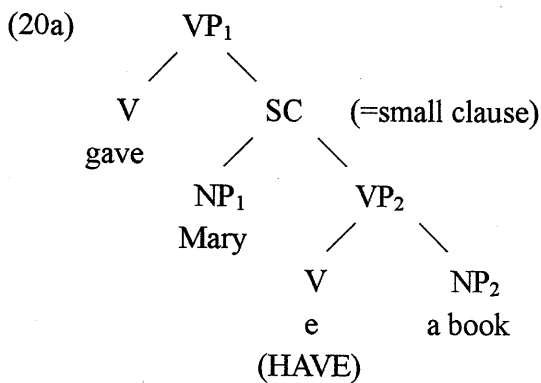
既に述べたように、「売る」「買う」などは「AがXにYをW円で売る」のように、4項を取れるが、「W円で」の部分は随意的な付加部(adjunct)である。従って、(18)の反例とはならない。もっとも、使役主を投射しない段階で、必須の内項が3つ現れ、VP シェルができることは(18)によって原理的には阻止されない。しかし、自然言語の述語の項構造はそこまで複雑化していないように思われる。

さて、Larson (1988)は、(16)のような与格構文(NP1-NP2-to NP3)を授与動詞の基本パターンと仮定し、二重目的語構文は与格構文の下位の動詞句VP1に受動化が適用されて派生されると分析する。即ち、与格構文のVP1の「主語」であった対象項は付加部にまで格下げされる。与格(=to NP)として実現する動詞の内格は受動化によって吸収されてしまい、目標項("Mary")はそのままでは格を受け取れない。よって目標項は格を付与されるためにVP1の指定部位置に上昇する(さらにV1'が動詞Vとして再分析され、隣接するNP("a book")に格を与える。



Larson の分析は与格構文を基本とし、そこから二重目的語構文を導く方法である。しかし、与格構文を派生の基礎とするアプリオリな根拠は見当たらない。たとえば優位性効果(superiority effect)の対比 ("Who did you give __ which paycheck ?" vs. "*Which paycheck did you give who __?"は非文) などによって、二重目的語構文の最初の内項が第二の内項よりも構造的に高い位置にあることは例証できるが、事態は与格構文でも同じである ("Which check did you send __ to who?"は良いが、"*To whom did you send which check __?"は非文)。

逆に、二重目的語構文を基礎として、与格構文をそこから派生させる見方も可能である。Aoun and Li (1989)がこの立場に立脚した分析を展開している。彼らは、(20a)のように、二重目的語構文の2つの補部は所有関係を表し、小節(small clause)を形成すると捉える(VP2の主要部Vは所有を表す音形のない動詞である)。他方、与格構文は、Larson とは逆に(20b)のように、二重目的語構文の最小動詞句 VP2が受動化を受けてできると分析する("a book"が格付与されるために上昇する)。



Aoun and Li の分析の根拠の一つは、次の(21)のような文の数量詞句の範囲をめぐる解釈の問題にある。(21a)のような二重目的語構文では目標(所有者)が対象物よりも一義的に広い範囲をもつ解釈しかない(すべての本を受け取った

特定の誰かがいる)。他方、(21b)の与格構文では数量詞句のスコープに2通りの解釈が可能である(特定の同じ本がすべての人に渡されたという解釈と、すべての人に何かある本が届いたという解釈)。

- (21) a. John gave [_{sc} someone [_{vp} every book]]. (some > every) 一義的
 b. John gave [some book [_{to} everyone]]. (some > every, every > some) 多義的

(21a)の二重目的語構文は基底構造であり、移動が含まれていないので"someone"が"every book"を非対称的にc統御し、スコープ解釈は一義的になる。他方、与格構文は基底構造と派生構造とで対象項になっている内項"some book"の位置が異なり、もう一つの内項より上位の場合もあれば下位の場合もある。従ってスコープ解釈が多義的になると仮定すれば、この対比は自然に説明できる。

さらに3項動詞の補部の間の束縛関係について見てみる。たとえば相互代名詞 each other は先行詞を必要とする照応形であり、局所領域の内部で先行詞によって束縛されなければならない(同一指示指標とc統御の条件)。(21a),(22b)が示すように、二重目的語構文でも与格構文でも内項の先行詞が照応形 each other よりも先行しているときには文法的である(つまり、どちらの先行詞も構造的に上位の位置にある)。ここで順序関係を逆転させた場合どちらも非文になることが予測されるが、二重目的語構文(=(22c))では完全に非文法的であるが、与格構文(=(22d))では容認度はかなり下がるが、非文法的とまでは言えないという(cf. 立石・小泉(2001))。これが正しいとすれば、与格構文における与格名詞句("to Tom and John")は、派生の途上で対象項よりも構造的に高い位置にあった可能性がある(即ち、(22a)の"Tom and John"と同じような位置である)。

- (22) a. Daniel showed [Tom and John] each other's friends.
 b. Daniel showed [Tom and John] to each other's friends.
 c. *Daniel showed each other's friends [Tom and John].
 d. ??Daniel showed each other's friends [to Tom and John].

しかし、この種の対比から即座に与格構文の構造的派生が二重目的語構文から出発すると結論づけるのは早計であろう。統語構造以外の要因(たとえば格付与の問題)が絡んでいる可能性も排除できないからである。英語の二重目的語構文では2つの補部名詞句の格付与(格照合)の関係はいわばその場で凍結されていて、2つの内項の位置を自由に入れ替えることができない(これが日本語やドイツ語と異なる点である)。たとえば与格構文の対格目的語には重名詞句の転位(heavy

NP shift)が適用されて to NP の右側に移動することが可能だが、二重目的語構文の左側の内項は重名詞句転位によって右側に移動することは許されない。

(23) a. I gave to John [everything that he demanded]. (OK)

b. *John sent a letter [every musician in the orchestra]. (不可)

そうだとすれば、to NP を含む与格構文では、対格—to NP という構造と（転移された）to NP—対格という構造の2つの解釈が原理的に可能であるのに対して、二重目的語構文はそのような二重性を一切許さないと考えることができる（従って(21), (22)の対比が生じる）。この観点から Aoun & Li の分析も理解できるだろう。

さらに言えば、そもそもこれら2つの構文タイプを同一の基底構造に還元する必要があるのかどうかということも問題になる。この2つの構文が同一であるという仮定は、Baker (1985)の UTAH (Uniformity of theta assignment hypothesis: 主題役割付与均一性仮説)に基づく（「同一の主題役割をもつ項はD構造 (=基底構造)において同一の統語構造を持っている」）。しかしながら、ミニマリスト理論に至ってD構造そのものが廃止された現在、UTAH の位置づけも甚だ疑問である。偶然ではあるが、相対立する見方をする Larson と Aoun & Li の立場の両方とも、一方の派生の方法が受動化(passivization)という統語操作を仮定している。このような操作が本当にこれらの統語過程に含まれているかどうか疑わしい。

2. 2. 英語の与格交替の分析 — 2つの構造

ここでは先に見た英語の授与動詞の2つの構文は一つの基底構造から導き出されるのではなく、異なる構造と意味表示を与えられていることを主張する。よく知られていることだが、与格構文と二重目的語構文とではそれらが表す意味範囲が異なる場合がある。与格では可能だが、二重目的語では許容されないケース((24a) vs. (24b)), 逆に二重目的語では問題ないが、与格では許されない((25a) vs. (25b))という場合がある。一般に、to NP で表わされる項は具体的な移動の目標として把握されねばならない（従って"give Mary an idea"は可能だが、"give an idea to Mary"は不可能）。また、目標が人である場合はどちらも適格であるが、目標が無生物の場所である場合は二重目的語構文とは相容れない((27b))。

(24) a. Mary pulled the cart to Ann.

b. *Mary pulled Ann the cart.

(25) a. Mary denied Beth the ice cream.

b. *Mary denied the ice cream to Beth.

(26) a. Mary sent a letter to Ann.

b. Mary sent Ann a letter.

(27) a. Mary sent a letter to New York.

b. *Mary sent New York a letter.

(26)(27)の対比から分かるように、同じく目標であっても有生の人間は所有者になるが(よって(26b)が可能)、単なる目標地は(27b)のように所有を表さない。次の例も同様である(cf. Haider (1993))。

- (28) a. that they will send everybody₁ a package to his₁ home address
b. dass sie jedem₁ ein Paket an seine₁ Privatadresse schicken werden.
c. 彼らは各会員にパッケージを各々の個人住所へ発送した。
動作主 + 受け手(着点) + 対象 + (無生)目標

授与動詞の中には(28)のように、有生の受け手と無生の目標が分離し、与格と(英語の to または to に類似した)前置詞句で表示される場合がある。「送る」「発送する」タイプの動詞がそれにあたる。一方、動作主が着点を表わす有生の相手に対象物を直接的に手渡すタイプの「あげる」「与える」、*"give"*タイプの授与動詞ではこの種の分裂は生じない(“??John gave Ann a package to her home address”)。

岸本(2001 影山編)では、英語の3項動詞は、「位置変化」だけを表わす3項動詞と、「位置変化+所有関係の転移」を表わす3項動詞とに区別されている。

- (29) 位置変化のみ (岸本 2001; 132)
a. Sue put a vase on the table. b. Mother poured milk into the glass.
c. * Sue put the table a vase.
(30) 位置変化+所有関係転移
a. Bill gave his car to Mary. b. John mailed a letter to Sue.
c. Bill gave Mary his car.

位置変化のみを表す3項動詞は二重目的語構文に現れることはできない。それに対し、位置変化に加えて所有関係転移を含意する3項動詞は与格構文と二重目的語構文を取る(cf. 岸本 2001)。(30b)は所有関係転移を表すわけではないが、手紙が届くことによって着点項に所有される結果が意図されている。岸本(2001; 134)によれば二重目的語の間接目的語が有生名詞であるという意味的制約は、単に生物か無生物かという問題ではなく、そこに結果としての $\text{Object}_1 \text{ HAVE Object}_2$ という所有関係が読み込めるかどうか起因している。たとえ目標が有生であっても位置変化が連続的移動として表される(32b)の動詞は(方言や個人の差はあるが)二重目的語構文をとれないという。(32b)は話者によって容認度がかなり揺れるが、“carry”, “pull”, “push”のような動詞は連続的移動に意味の中心があり、所有関係が伝えにくいとされたとされる。これはPinker(1989)が $\text{continuous imparting of force}$ (力の連続的添加)と呼んだ制約である。ただし“take”は、語彙意味の中に直

示的に着点を含みこむので連続移動でも(32c)は許容できる (岸本 (2001); 134)。

- (31) a. John {threw/tossed/kicked} the ball to Mary.
b. John {threw/tossed/kicked} Mary the ball.
- (32) a. John {carried/pulled/pushed} the ball to Mary.
b. %??John {carried/pulled/pushed} Mary the ball.
c. John took Mary the letter.

その他の制約は以下の通りである。((33)-(36)の例文の一部は Krifka 2001 から引用)

- (33) a. 伝達手段に関与する動詞は2つの構文に現れる(phone, e-mail).
b. Ann faxed the news to Beth. c. Ann faxed Beth the news.
- (34) a. 発話の様態(manner of speaking)を表す動詞は二重目的語構文に現れない。
節を選択する発話動詞(say, tell) も二重目的語構文を許さない。
b. Ann shouted the news to Beth. c. *Ann shouted Beth the news.
(scream, yell, whisper など)
d. Ann said to Beth that it was raining. e. *Ann said Beth that it was raining.
- (35) a. 所有関係を阻止する動詞は二重目的語構文だけを取る。
b. Ann denied Beth the ice cream. c. *Ann denied the ice cream to/from Beth.
- (36) a. ロマンズ語系の動詞, 2音節以上(強勢が第1音節にない)の動詞は二重目的語構文を取りにくい。
b. Beth donated the sofa to the museum. c. *Beth donated the museum the sofa.
d. Beth obtained a ticket for Ann. e. *Beth obtained Ann a ticket.
f. Jean a donné la voiture à Anne. g. *Jean a donné Anne la voiture.
(=Jean gave the car to Anne)
- (37) a. 二重目的語構文では主語が所有関係の転移を起こす動作主ではなく, 原因(きっかけ)の解釈でも成立する。また物理的移動がなくても許容される。
b. Mary gave John an idea. c. John gave me his cold.

(36)の制約はフランス語の3項動詞が前置詞を伴う与格構文しか許容せず, 二重目的語をとらないことと関係する。これは, ロマンズ系言語には真の格形態としての与格(dative)が存在しないことと関連する。勿論, では英語の二重目的語の格がいかに認可されるかという問題は残る。以上の議論から英語の二重目的語構文と与格構文は, 相互に意味的に関連しあっているが, 別個の派生構造と意味表示をもつものだと考える。具体的には以下のように分析する。

- (38) 二重目的語構文と与格構文に関わる動詞は異なる意味表示をもっており, 同じ語彙項目であっても多義性(polysemy)をもっている。

- (39) a. 二重目的語の意味表示 : A (subject) Verb B (IO) C (DO)
 A=使役主, B=所有者 (経験者) C=対象物 (theme)
 $\exists e \exists s [e = \text{CAUSE}(\text{DO}(A, C), s) \ \& \ s = \text{HAVE}(B, C)]$

使役事象 e と所有状態 s が存在し, 事象 e では使役主 A が何らかの動作 (原因) を対象 C に起こすことによって結果として所有状態 s を引き起こす。ここで s は, 所有者である B が対象物 C を所有しているという状態を表わす。

- (39) b. 与格構文の意味表示 : A (subject) Verb C (DO) B (to/for NP)
 A=使役主, B=目標 C=対象物 (theme)
 $\exists e_1 \exists e_2 [e_1 = \text{CAUSE}(\text{DO}(A, C), e_2) \ \& \ e_2 = \text{MOVE-TO}(C, B)]$

使役事象 e_1 と引き続く事象 e_2 が存在し, e_1 で動作主 A が対象 C に働きかけを行うことによって移動事象 e_2 が惹起される。 e_2 は, 対象物 C が目標 B に向かって移動するという事象を意味する。 B への到達は前提されていない。

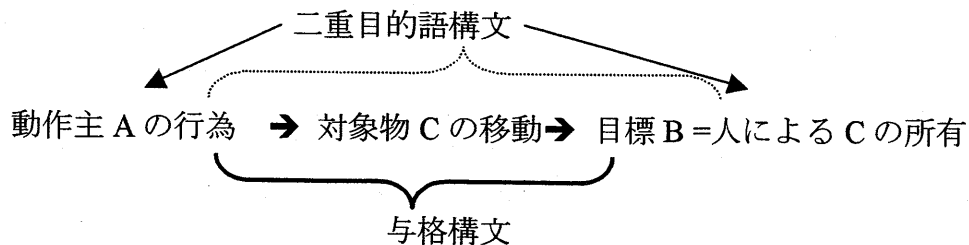
ただし, 両構文の対象物は具体物(object)でも, 伝達情報(information)のような抽象的なものでもかまわない。

(39a)(39b)で, 間接目的語の所有者 (経験者) と, 前置詞句の目標(goal)というように別々の意味役割が与えられていることに注意されたい。従って, 統語構造への項の投射も同じでなくてかまわない。「所有者=経験者」という術語は分かりにくいかもしれないが, 一定の状態の担い手 (有生を前提) を意味している。

(39)a と (39)b は同一の真理条件をもっているわけではないが, 部分的に同一の事態で真になりうる。

(40) 与格構文で表わされた事態が成立していて, かつ, 与格構文の目標 B が有生の人間であり, 対象物 C の移動変化が目標地点にまで到達したとき, HAVE (B,C) という事態も成立する。従って二重目的語構文も成り立つ。

(41) 2つの構文の間の関連



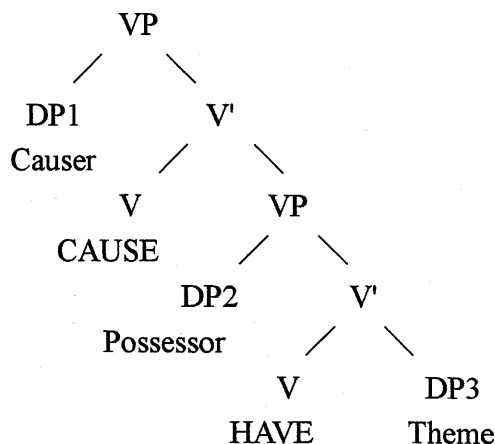
ただし pull など、連続移動を含意し、移動様態を特定化する動詞の場合は、MANNER (e_1, e')の意味部分を必然的にもっている(e_1 は使役事象で、 e' は e_1 によって引き起こされる対象物の移動事象)。そのため、この様態部分は移動を含意する与格構文には適合するが、移動要素を含意しない二重目的語構文とは適合しない(それゆえに排除される)。(cf. Krifka 2001)

(42) 与格構文は可能だが、二重目的語構文では不適格となるケース。(i) 目標が無生である(所有者になれない)。(ii) 目標に向かっての移動は表わされるが、目標への到達が示されていない場合(所有が明示できない)。(iii)連続移動によって移動様態に常に言及する意味を含む動詞や発話様態に言及する動詞の場合。これらは必然的に移動事象というサブイベントで表示されるために、二重目的語構文の枠組みをはみ出してしまうのである。

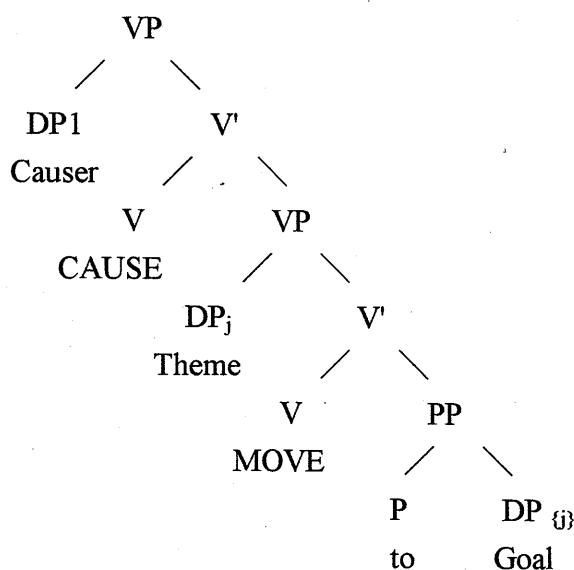
(43) 二重目的語構文は可能だが、与格構文は不適格となるケース。(i)目標物が無生で所有関係が生じない。(ii)動詞の語彙意味が対象物の移動変化とは相容れない場合(イディオム表現や、所有関係の阻止を表わす deny など)。

統語構造としては、以下のような構造を設定する。Larson の VP シェル分析を踏襲するが、2つの構文は一方が基底構造で、他方が派生構造といった依存関係はなく、それぞれ独立したものであると考える。統語構造は、語彙意味表示と連動した構造をとるものと仮定し、語彙分解意味構造において、上位シェルは使役意味、動詞 V はプリミティブである所有(HAVE)や、移動(MOVE)を抽象的に表わす(cf. Krifka 2001, Hale & Keyser 2002)。与格構文(44b)では、指示指標 j が対象項 DP と、下位にある前置詞句内の目標項に与えられているが、これはいわば後方束縛(backward binding)の現象を考慮したものである(マージナルだが、目的語が後方の前置詞句によって束縛されうる; Hale & Keyser 2002)。

(44) a. 二重目的語構文



(44) b. 与格構文



英語の二重目的語への格付与については諸説があるが、それらを逐次検討する余裕はないので、ここでは最下位 HAVE 部分の動詞は語彙格（内在格）としての対格を対象項に付与する（あるいは照合関係にある）と仮定する。直接目的語である対象項は受動などの統語操作を受けないからである。他方、上位の間接目的語である所有者項は上位の使役動詞の直接的な補部領域にあり、構造的対格を付与される（それゆえに受動化で主語位置に上昇する）。

(44)の2つの統語構造に対して、「giveのような同じ語彙項目に2つの異なる統語構造を立てるのはエレガントではない」という疑問が生じるかもしれない。それについては(41)のシェーマが表わすように、同じ3項動詞が指示する事象が（交わりを含むが）微妙にずれていること、同じ音声形ではあるが、派生に入る際には格フレームの相違と前置詞の有無によって区別されている（それゆえに競合関係にはない）——ことを指摘しておきたい。

2. 3. ドイツ語・日本語の3項述語の統語構造

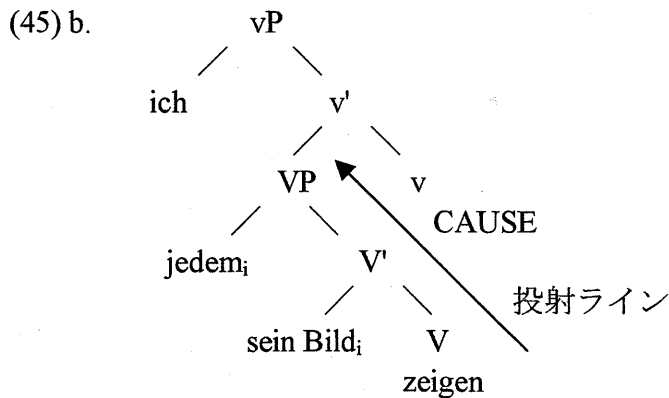
以上、英語の3項動詞を考察してきた。次にドイツ語・日本語の分析に移る。英語の3項動詞にかかわる2つの構文はドイツ語や日本語における3項述語構文の分析とどのように関係するだろうか？

2. 3. 1. 3項述語とVPシェル構造

主要部先行型(SVO)の英語の3項動詞の投射に関して VP シェル構造を仮定し

だが、ドイツ語や日本語などの主要部後続型(SOV)の言語でも VP シェルは必要であらうか？ 基底構造において上向き左枝分かれ構造をなすOV言語では、左枝分かれも動詞の統率の方向性も満たされており、動詞移動の必然性もない。従って、Larson 流の VP シェルの積み重ねはアプリアリには要求されない。

(45) a. Ich will jedem_i sein_i Bild zeigen. (私は各自に自分の写真を見せる)



OV 言語では Fukui(1985)のように、語彙範疇は基本的に補部の数に応じて、シングルバーでの繰り返しが可能と考えられる。ただし、外項である使役主主語は元の動詞句を補部として、使役意味(CAUSE)を表わす軽動詞 v が投射し、その指定部位置に生成されると考える。

(45b)の構造が正しいことは、ドイツ語の分離動詞を見ても分かる。分離動詞 (particle verb)は、レキシコンにおいて元は前置詞・副詞などの分離接頭辞 (particle) と結合した複合動詞であるが、動詞移動 (たとえば動詞第 2 位) を引き起こすのは主要部の動詞 V⁰ だけで、分離接頭辞は文末にとどまる。補部はすべて分離接頭辞の左側 (V 位置の左) に位置する。(46c),(46d)のように名詞句補部の左に分離接頭辞が移動することは許されない。つまり、動詞第 2 位 (時制位置) と、文末の基底の動詞位置との間に動詞移動が生じるような中間位置は存在しない。

(46) a. Er hat Maria gestern das Geld zurückgegeben. (彼は昨日 Maria にお金を返した)

b. Gestern [gab_j] er Maria das Geld [v zurück t_j].

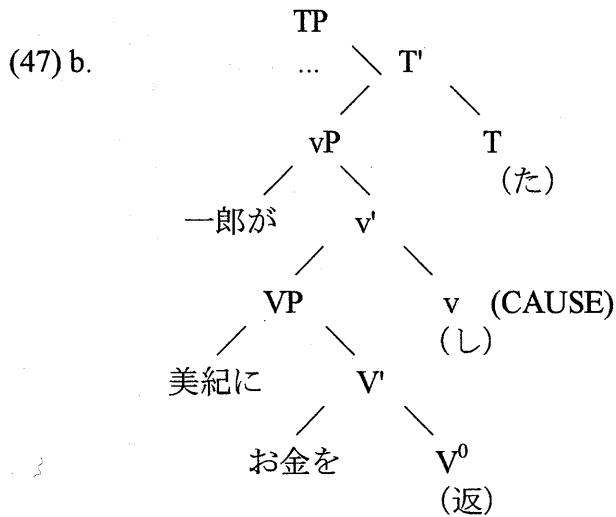
yesterday gave he Mary the money back

c. *Gestern gab er Maria zurück das Geld _.

d. *Gestern gab er zurück Maria das Geld _.

日本語の 3 項動詞構文も基本的に(45)と同じような統語構造をもつと考える。

(47) a. 一郎が美紀にお金を返した。



既に述べたように、ドイツ語の場合も、日本語の場合も基底構造では動詞主要部は末尾にあるので、最下位の動詞句の上に「シェル」として重なる軽動詞 v の部分は統語論的には必須のものではない。しかし、語彙意味論的に、3項動詞が複合的な使役意味を含み、それが統語構造にも反映されているとするならば、英語の構造と基本的に類似した構造を設定することが理論上は得策であろう。

2. 3. 2. ドイツ語の3項述語構文の格パターン

次に、ドイツ語の3項述語がとる格・前置詞のパターンを考察する。ドイツ語の二重目的語の格標示については、現在では与格+対格パターンとなっているが、歴史的に見ると古くは、与格+対格パターン以外に、対格に対応する対象に対して、部分格(partitive)としての属格(genitive)を用いることがあった。つまり、与格一部分格である。これは名詞的な指示対象が意味的に定でなく、不定の部分を表わすときに用いられた形式である。これはまた、部分格に対応する前置詞句"von NP" (~について幾つか)の形をとることもあり、"Wer hat von dem Kuchen gegessen?"(だれがケーキをつまみ食いたんだ?)のように、現代ドイツ語でも現れることは可能である。

(対象=部分格の例)

(48) a. Denn er gibt seines Brots (von seinem Brot) den Armen. (「ソロモン箴言」22, 9)

(彼は自分のパンを裂いて貧しい人たちに与えるからだ)

(48) b. So nun ihr (...) könnt dennoch euren Kindern gute Gaben geben. (「マタイ福音書」6, 7-11.) (あなたがたは自分の子供には良い物を与えることができる)

上の例は初期近代ドイツ語期のルターの翻訳によるが、(48b)のように不特定の対象物を対格によって表わすこともできた。しかし本稿では、部分格にかかわる格の問題は検討せず、対象を表わす対格に限定する。

"geben" (=give)のような典型的授与動詞の場合、目標(所有関係の相手)が人の場合、内項は与格—対格パターンで格表示されることが多い。英語の与格構文のように、"Ich gab das Buch zu Hans" (=I gave the book to Hans)と、前置詞 zu+人によって目標を表すことは稀であるが、Web上で検索した例を幾つか挙げる。

(49) a. Gott hat ein Gerichtsurteil des ewigen Verdammnis zu ihm gegeben.

(神は永遠の呪いの判決を彼に対して与えられた)

b. sie werden zu ihnen gegeben werden von meinen Gewändern, zu denjenigen, die in den Wolken sind.

(それらは私の衣服の中から彼ら雲の中にいる人々に与えられるだろう)

(50) „Meine Tante? Du hast mir nie erzählt, dass ich eine Tante habe. Und warum hast du mich damals nicht zu ihr gegeben anstatt zu Hammyrs?“ (Lady Patricia, Die Königslilie) (<http://gwdu05.gwdg.de/~rzellwe/nhs/node373.html>)

(「おばさん?私におばさんがいるって一度も話さなかったね。で、なぜあなたは当時私を彼女のところにやらなかったの? Hammyr 家じゃなくて」)

(49)の例は目標を表す zu NP(=to NP)の名詞句が有生の人を表わし、対象項に後続している。教会の説教などと結びついた古風な文体であるが、特に所有者が移動の目標として強調されている(ほかの X でもなく Y に与えられる)と考えられる。また、(50)は web 上で検索した現代語の小説の例である。ここで注意すべきなのは、目標が有生の人である(「彼女=おばさん」)ことだけではなく、移動対象も有生(mich=「私」)であることである。従って、目標と移動対象との間で有生—無生の優先原理は働かない。むしろ「誰の所に預けられるのか」がこの文脈での問題となり、目標が対比的に強調されて後ろに置かれている(あるいは対象が前置されている)。さらに zu NP(目標)が前に来るのではなく、対象物(対格)> zu 目標の順序になっていることは示唆的である。

(49),(50)のような例外はあるが、現代ドイツ語の授与動詞"geben"が与格—対格の2つの格表示(二重目的語)と密接に結びついていることは明確である。このことは、ドイツ語では格形態として与格が明示的であること、このことによって3項動詞が与格—対格という二重目的語格標示パターンと簡単に結合することを意味する。特に、"geben"のような典型的な授与動詞は所有状態の発生(HAVE)と結びつくという前節の分析を強化するものである。「典型的」というのは移動事象の

使役化の際に移動様態などの何らかの条件を特定化していないという意味である。

しかし主格(使役)ー与格(所有者)ー(対格)移動対象以外のパターンもある。"geben"の例をいくつかを以下に挙げてみる。

(51) 授与動詞 "geben"のパタン (I) Nom-Dat-Acc ノーマルなパタン

- a. Hans gab einem Kind Bonbons. (Hans は子供に飴玉を与えた) 人 Dat—モノ Acc
- b. Allah wird dich segnen, wenn du mir noch ein klein wenig Wein gibst, o Baschmahandi!" (*Projekt Gutenberg*) 人 Dat—モノ Acc
- c. Auch diesmal **gaben** beide Seiten einander die Schuld für die Unruhen. (*Der Spiegel ONLINE*) 人 Dat—モノ Acc
- d. Wir haben dem Schiedsrichter 50.000 Dollar **gegeben**, in einem Koffer, vor dem Spiel, sagt er lachend. (*Der Spiegel ONLINE*) 人 Dat—モノ Acc
- e. Er hat mir unheimlich viel Kraft **gegeben** und mir die Freude am Schwimmen zurückgebracht (*Der Spiegel ONLINE*) 人 Dat—モノ Acc
- f. Hans gab einem Kind eine Antwort. (Hans は子供に回答した) 人 Dat—発話
- g. Hans gab einem Kind einen Befehl. (Hans は子供に命令を出した) 人 Dat—発話
(類例 jemandem Bescheid geben/ Erlaubnis geben/ Rad geben / Recht geben)
- h. Ich gab ihm meine Stimme. (私は彼に一票を投じた) 人 Dat—行為・イディオム
- i. Ich gab ihm die Hand. (私は (握手のため) 彼に手を差し出した)

人 Dat—行為・イディオム

(類例 : jemanden Mut geben / Unterricht geben など多数のイディオム)

(52) 授与動詞 "geben"のパタン Akk-PP (前置詞句)

- a. Hans gab den Brief zur Post (auf die Post). (手紙を郵便局へ出した)
モノ Acc—zu/auf 目標 (場所)
- c. Hans gab den Koffer in die Gepäckaufbewahrung. (トランクを手荷物一次預かり所へ預けた)
モノ Acc—in 目標 (場所)
- b. Hans gab das Auto zur Reparatur. (車を修理に出した) モノ Acc—zu 目標(事象)
- e. Hans gab Salz an die Speise. (料理に塩を振った) モノ Acc— an 目標 (場所)

(51), (52)の例が示すように、与格ー対格パターンは有生の人間を与格で標示し、所有関係 (所有物の移動), 発話伝達, イディオムの表現による動作を表わす。これらは(「飴玉を与える」場合のように) 対象の位置変化の意味を比較的容易に読み込めるものもあるが, "jemandem Mut geben"(=ヒトに勇気を与える)のように対象物の移動がほとんど問題にならない例もある(「勇気を与える」原因を作るだけで

よい)。一方、前置詞 zu /an /auf をとる例では、目標はすべて無生物の目標であり、対象物の移動を明確に表わしている((49),(50)のように目標が有生の場合もあるが)。“zur Reparatur geben” (修理に出す) の場合は、具体的場所というよりは、目的を表わす事象であるが、それでも「修理」が行われる場所・目標 (修理工場) への移動が含意されていると言えるだろう。

授与動詞 "geben" の類義語としては次のような動詞が挙げられる・

(53) abliefern(引き渡す), abtreten(譲り渡す), aushändigen(手渡す), austeilten(分け与える), beschenken(贈り物する), darbieten(提供する), darreichen(差し出す), hinterlegen(預ける), präsentieren(手渡す), reichen, schenken(贈る), spendieren(おごる), verabreichen(与える), verehren(贈る), vergiften, vermachen(贈る), versichern, versprechen, weggeben(譲る), zeigen, zueignen(捧げる), zureichen (手渡す), zuteilen (分配する), überantworten (預ける), übereignen (委譲する), übergeben, überlassen (任せる), überreichen, überstellen(引き渡す), übertragen (委譲する)

授与動詞 "schenken" (贈る) も同様のパターンをとり、与格—対格が優勢である。

- (54) a. Ich schenke ihm ein Buch. (私は彼に本を贈る) 人 Dat-モノ Acc
 b. j /et<3> Aufmerksamkeit schenken (人・モノに注意を払う) 人 Dat-コト Acc
 c. j /et<3> Glauben schenken (人・モノに信頼を寄せる) 人 Dat-コト Acc
 d. Bier ins Glas schenken (ビールをグラスに注ぐ) モノ Acc-PP
 e. Vielleicht hätte er dem Wastl einen dankenden Blick oder ein Geldstück geschenkt, (Ludwig Thoma - Der Ruepp) 人 Dat-コト Acc

伝達動詞の類もこのパターンに入り、多くは与格—対格の格パターンをとる。しかし、若干ではあるが、伝達の受け手を対格で表示し、伝達内容(対象)を前置詞句で表わすタイプもある。schreiben などの場合は、与格—対格、対格—前置詞句パタンの両方がある(einen Brief an sie schreiben 「手紙を彼女に宛てて書く」)。有標の例外的な格付与パターンとしては、“lehren” のように対格—対格の形の二重対格パターンがある (他には伝達動詞ではないが, nennen (A を B と呼ぶ) がある)。

- (55) a. j<3> etwas<4> sagen (言う) 人 Dat コト Acc
 b. j<3> etwas<4> erzählen (話す, 語る) 人 Dat コト Acc

- c. j<3> etwas<4> mitteilen (伝達する) 人 Dat コト Acc
- d. Was kriege ich, wenn ich Euch den Inhalt dieses Briefes **mitteile**? (*Theodor Fontane - Frau Jenny Treibel*) 人 Dat コト Acc
- e. j<3> etwas<4> ausrichten (伝える) 人 Dat コト Acc
- f. j<3> etwas<4> vorlesen (読んで聞かせる) 人 Dat コト Acc
- g. j<3> etwas<4> schreiben (書く) 人 Dat コト Acc
- h. etwas <4> an <4> schreiben (書く) モノ Acc 人 PP
- i. Während dem Umspannen **schreibe** ich Dir flüchtig nur ein paar Worte. (*Hermann Fürst von Pückler-Muskau - Briefe eines Verstorbenen*) 人 Dat コト Acc
- j. j<4> über <4> informieren (情報を伝える) 人 Acc コト PP
- k. j<4> etwas<4> lehren (教える) 人 Acc コト Acc

英語では発話様態を示す動詞は二重目的語構文をとれないが、ドイツ語の"sagen"は英語の"say"と同起源で、音声を口から発することに主眼があるが、与格—対格をとる("say"は二重目的語を容認しない)。英語の shout, scream など発話様態動詞に対応するドイツ語動詞は"schreien"(叫ぶ)を例にとると、基本的には zu+人を取るが(=(56a)), 人が与格で表示されることもある。しかし、これは後続する前置詞句が表わす身体所有者と関わるいわゆる所有の与格 (Pertinenzdativ)として解釈される(=(56b),(56c),(56d))。あるいは、zuschreien (=schreien + zu に向かって叫ぶ), anschreien (=schreien + an 大声で叫びかける)のように分離動詞(particle verb)の形で不変化詞に制御された格であると考えられるので注意が必要である。例えば、(56f)では人が対格で表示されるが、これは明らかに(元は前置詞の)不変化詞 an が付与する格である。要するに、英語では"tell"は問題なく二重目的語をとるが、音声を発するタイプの say を含んで発話様態を明示的に表わす発話動詞は二重目的語を選択できずに、PP(to NP)を取る。他方、ドイツ語では say と類似の sagen は発話様態の特性は非常に希薄であるために、与格と調和する。しかしその他の明確な発話様態動詞は与格となじまないと考えられる。

- (56)a. Ja, im Paroxysmus ihres Fiebers **schrie** sie zu mir, der ich gerade aus der Dachbodenluke hinaussah, mit klingender Kehle hinauf: "Pappi! (*Otto Ernst - Appelschnut / Wie Appelschnut umzog*) zu 人- コト
- b. j<3> seine Verachtung ins Gesicht schreien. (人に大声で侮辱の言葉を叫ぶ)
- c. Schrei mir doch nicht so ins Ohr! 人 Dat -身体 PP
- d. "Deine Dummheit auch nicht", rief mein Vater, und zornig, wie ich ihn noch selten

gesehen hatte, **schrie** er dem Gistel ins Gesicht: "Du bist blitzdumm! (*Peter Rosegger - Als ich noch der Waldbauernbub war / 13*) 人 Dat -身体 PP-コト

e. **schrie** Jenny auch Fräulein Traute zu, die noch immer am Tische saß und nicht von der Kasse wich. (*Projekt Gutenberg*) 人 Dat

f. Heda, alter Wachholder", **schrie** er dann mich an, "gleiche ich nicht aufs Haar einer Kammerverhandlung? (*Wilhelm Raabe - Raabe: Die Chronik der Sperlingsgasse / 8*) 人 Acc- コト

「発送」を表わす"schicken", "senden"になると、与格一対格と、前置詞句タイプの両方のバリエーションが同程度に見られる。

(57)a. j<3> eine Postkarte schicken (人にはがきを出す) 人 Dat-モノ Acc

b. j<3> ein Telegramm schicken (人に電報を出す) 人 Dat-モノ Acc

c. j<3> etwas<4> ins Haus schicken (人にモノを宅配して送る) 人 Acc- PP

d. j<4> in die Schule schicken (人を学校に通わせる) 人 Acc- PP

e. j<4> ins Bett (zu Bett) schicken (人を寝かせる) 人 Acc- PP

f. einen Boten zum Arzt schicken (医者に使いをやる) 人 Acc- PP

g. Ich **schicke** meine eigene Lady Macbeth mit der Miete zu ihr. (*Wilhelm Raabe - Der gute Tag*) 人 Acc- PP (zu)

h. Also, dann **schicke** ich morgen früh 'n Telegramm an Tante Jule..." (*Ludwig Thoma - Altaich / 14. Kapitel - 3*) モノ Acc 人 PP

(58)a. j<3> Glückwünsche senden (人に祝い状を出す) 人 Dat-モノ Acc

b. ein Paket an j<4> senden (小包を人あてに送る) 人 Acc- PP

c. Die Sonne sendet ihre Strahlen zur Erde. (太陽は光を地上へ投げかける)

モノ Acc- PP

d. Ich **sende** Dir Deinen Koffer und bitte Dich, Kairo augenblicklich zu verlassen. (*Karl May - In Kairwan*) 人 Dat- モノ Acc

e. Geben Sie, Herr Selicour, noch heute Abend **sende** ich den Aufsatz an die Behörde. (*Friedrich Schiller - Der Parasit / IV. Aufzug*) モノ Acc -人 PP

f. Da es nun dem König zu Ohren kam, daß niemand im ganzen Reich ihm die gebührende Ehre verweigerte, außer Herzog Adelger, so **sandte** er Boten nach Bayern und ließ ihn nach Rom entbieten. (*Alexander Schöppner - Bayrische Sagen / 1365*) 人 Acc- 目標 PP

(57),(58)の変異はこれまでの分析から当然予測されることである。「発送」タイプの場合には, "geben"とは違って使役主の行為や動作主の行為が即時的に目標(所有者)による所有を意味するわけではなく, 所有関係の発生までに時間的空間的な距離がある。この場合には, 目標への対象移動に焦点がシフトして"an __ senden" (〜に送る) という前置詞パターンが優位になってくる。また, 移動対象が有生の人になり, 目標が無生の場所になるという移動のパターン (対格—前置詞句) も生じやすくなる。

このほかに bringen(もっていく), bescheren (贈る), gewähren (許可, 与える), überreichen (手渡す), widmen (捧げる), vorstellen (紹介する)などの3項動詞がある。

- (59) a. j<3> etwas<4> bringen (人にあるものを持っていく) 人 Dat-モノ Acc
 b. Bringen Sie mir bitte ein Bier! 人 Dat-モノ Acc
 c. j<4> auf die Polizeistation bringen (人を警察につきだす) 人 Acc-場所 PP
 d. j<4> zum Bahnhof bringen (人を駅に連れて行く) 人 Acc-場所 PP
 e. Ich **bringe** ihnen heiÙe Milch. (*Der Spiegel ONLINE*) 人 Dat-モノ Acc
 f. Er **bringe** Einstein nach Berlin zurück, sagte Hanoch Gutfreund. (*Der Spiegel ONLINE*) 人 Acc-場所 PP
 g. j<3> etwas überreichen (人に〜を授与する, 贈呈する) 人 Dat-モノ Acc
 h. Sie **überreichen** dem Brakenbury ein Papier, welches er liest. (*Projekt Gutenberg*)
 i. Er will der Weisheit die Krone **überreichen**. (*Hugo von Hofmannsthal - Das Salzburger große Welttheater*) モノ Dat-モノ Acc
 j. Vuk Drackovic kann aber nicht das ganze Volk seinen Sponsoren außerhalb Jugoslawiens als Geschenk **überreichen**. (*Die Zeit 1999*) 人 Acc- 人 Dat
 k. j<3> etwas<4> widmen (人に〜をささげる) 人 Dat-モノ Acc
 l. meinem Freund ein Buch widmen (友人に自著をささげる) 人 Dat-モノ Acc
 m. Ich widme dieses Buch meinen Eltern. (この本を両親に捧げる)
 モノ Acc-人 Dat
 n. sein Leben der Musik widmen (生涯を音楽に捧げる) モノ Acc-コト Dat
 o. Ich **widme** mich ganz meinem Genuss - allein. (*DIE WELT*) 人 Acc-コト Dat
 p. Ich **widme** diesen Sieg Italien und allen Italienern, die mit derselben Leidenschaft und Bestimmtheit arbeiten wie die Ferrari-Männer. (*Süddeutsche Online*) モノ Acc-コト Dat
 q. Darf ich Ihnen meine Frau vorstellen? 妻を紹介させていただきます
 r. einen Freund dem Professort vorstellen 友人を教授に紹介する

- s. Gestatten die Herren, daß ich Ihnen Herrn Lothar Brandt **vorstelle**. - Herr Graf von Trast. (*Hermann Sudermann - Die Ehre*)
- t. Ja, und zwar dadurch, daß ich dir in diesen beiden Herren zwei Landsleute **vorstelle**. (*Projekt Gutenberg*)
- u. Erlauben Sie, daß auch ich mich Ihnen **vorstelle**! (*Karl May - Durch die Wüste*)

bringen(もっていく, 連れて行く)タイプは, 目標が人で, 移動対象がモノである場合には与格—対格, 移動対象が人で, 目標がモノ(場所)であるときは, 対格—前置詞句のパタンをとる。興味深いのは, "widmen"(捧げる), "vorstellen"のように, 対象物が有生の人であることが多いタイプの語順である。この場合は, 対格—与格(対象—目標)の語順が優勢である。

英語では, 連続移動を表わす carry, push, pull などは二重目的語構文を取りにくいと言われるが, ドイツ語の場合も同様に前置詞タイプが多い。

- (60) a. Sie zog ihn ins andere Zimmer. (彼を別の部屋に引き込んだ) 人 Acc-PP
- b. Sie zog ihr Kind an sich. (～を自分の身に引き寄せた) 人 Acc-PP
- c. Er schiebt den Ball ins Tor. (ボールをゴールに押し入れる) モノ Acc-PP
- d. Brot in den Ofen schieben (パンをオーブンに入れる) モノ Acc-PP
- e. das Kind ins Bett tragen (ベッドに運ぶ) モノ Acc-PP

所有関係を拒否するタイプの動詞は英語と同じように二重目的語すなわち与格—対格を取る。ablehnen(拒否する)のように, 対格だけを取るタイプもある。

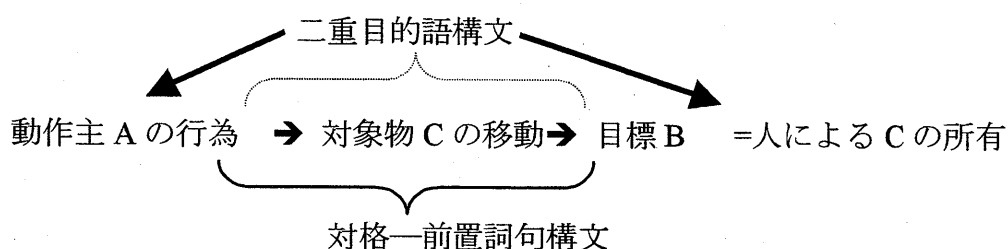
- (61) a. j <3> eine Hilfsleistung verweigern (助けを拒む)
- b. Man hat ihm verweigert, das Haus zu betreten. (人は, 彼に対して家に入ることを拒んだ) 人 Dat-コト
- c. Er hat die Bitte seines Partners abgelehnt. (先方の頼みを断った) コト Acc

以上ドイツ語の主な3項動詞を英語との関連で分析した。これらのパタンから次の結果が出せる。ドイツ語の3項動詞は, 基本的には英語の3項動詞の構文と同様に2つの意味表示をもつ。しかし与格の格表示が明確であるので, 所有関係成立(=授与)に力点があるとき, 即ち人(有生物)が目標を表わし, 人が移動物を所有する意味をもつ時は与格—対格で表わされることが多い。"geben"で見たように, デフォルトパタンは与格—対格で, zu 名詞句を取るのは有標である。一方, モ

ノ（あるいは有生）の移動に力点があるときは前置詞句によって表わされる傾向が強い。与格—対格と前置詞構文の区別は基本的には英語の場合と同じである。

(62) 対格—前置詞構文で表わされた事態が成立している、かつ、対格—前置詞構文の目標 B が人間（有生）であり、対象物 C の移動変化が目標地点にまで到達したとき、HAVE (B,C) という事態が成立する。従って与格—対格構文も成り立つ。
●しかしドイツ語では、両方の事態が成立するときは、デフォルトとして与格—対格が優先される。対格—前置詞句は、より強く移動事象を強調する。

(63) 2つの構文の間の関連



(※英語よりも移動事象に関する2つの構文の競合が弱く、両者の区別が明確)

(64) a. 与格—対格の意味表示 : A (subject) B (IO) C (DO) Verb

A=使役主, B=所有者(経験者) C=対象物 (theme)

$\exists e \exists s [e = \text{CAUSE} (\text{DO}(\text{A}, \text{C})), s] \ \& \ s = \text{HAVE} (\text{B}, \text{C})]$

(65) b. 前置詞句構文の意味表示 : A (subject) C (DO) B (zu/an/auf/in NP) Verb

A=使役主, B=目標 C=対象物 (theme)

$\exists e_1 \exists e_2 [e_1 = \text{CAUSE} (\text{DO}(\text{A}, \text{C}), e_2) \ \& \ e_2 = \text{MOVE} \text{-TO}(\text{C}, \text{B})]$

上記の(64),(65)の意味表示は英語の場合と同じであるが、与格—対格構文の場合、与格を利益者(benefactive)と解釈する場合も含まれるとすれば、(64)は以下の(67)のように拡張されねばならないだろう。

(66) a. *John opened Mary the door. (「ドア」が所有されるわけではない)

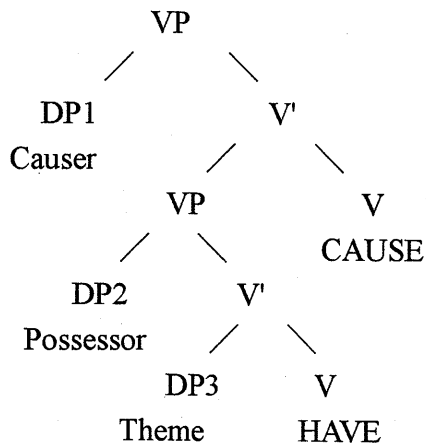
b. Hans öffnete Maria die Tür. (ドアを開けてやった) OK

(67) $\exists e \exists s [e = \text{CAUSE} (\text{DO}(\text{A}, \text{C}), s) \ \& \ \text{HAVE} (\text{B}, s)]$

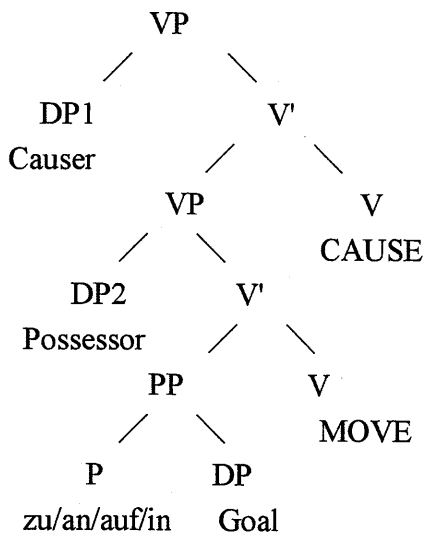
与格=利益者の場合。使役者(動作主)A が対象物 C に働きかけを行い、その結果、利益者 B は状態 s を利益者として受け取る(所有する)ようになる。

これら2つに対応する統語構造は以下の形をなす。

(68) a. 与格—対格パターン



(68) b. 対格—前置詞句構文



2. 3. 3. ドイツ語の与格・対格の語順について

前節でドイツ語3項動詞の格・前置詞句のパターンを検討したが、内項の語順については決定的なことは何も議論していない。そこでこの問題を考察する。

目標を表わす前置詞句(PP)が動詞に最も近い位置、即ちSOV語順の動詞の直前の位置に現れることは明らかである。3項動詞が意味的に使役事象と結果事象(状態)を含んでいて、前置詞句は状態変化の結果部分(意味階層の最下位部)を構成しているのであるから、階層的に最下位であり、語順でも対格—PPとなる。統語的に見ても、前置詞をある種の内在格(inherent case)として把握するならば、内在格は動詞に隣接した部分でのみ認可されるので、動詞に隣接しなくてはならない。

(69) a. Sie sollen tausende Tonnen giftige Industrieabfaelle wie Öle oder Klärschlämme unerlaubt über einen Zwischenhaendler in Essen in eine Verbrennungsanlage im nordrhein-westfaelischen Lünen gebracht (Deutsche Welle 2002/09/07)

Acc- PP (in) bringen

b. Gestern habe ich meinen Freund nach Hause gebracht. Acc-PP (nach) bringen

c. Ich habe ein Paket an meine Eltern gesendet. Acc- PP (an) senden

では与格と対格の語順はどうか？与格—対格と対格—与格のどちらが基本語順であるかについては、様々の議論がなされているが、与格—対格を(無標の)基底語順とする説が優勢である(cf. Lenerz 1977)。これによれば、ドイツ語の格は基底構造で主格—与格—対格というデフォールト語順として具現する。確かに、与格が有生(所有者)項で、対格は対象(無生)項の場合は圧倒的にこのパターンになる。

(70) a. Sie gab ihrer Nichte Taschengeld. Dat-Acc geben

b. Ich habe meinem Freund in Amerika ein Videoband geschickt. Dat-Acc schicken

c. Ich schreibe meinen Eltern einen Bried. Dat-Acc schreiben

d. Sein Misserfolg versetzte der Firma einen Schweren Schlag. Dat- Acc versetzen

しかし、それ以外の例外も存在する。前節でも見たように、"vorstellen"(=紹介する)のように対象物が有生(人)を表わすような場合には対格—与格の語順もよく見られる。そのほか、以下の動詞は対格—与格のパタンをとることが多い。

(71) a. Man hat die Kinder einer Gefahr ausgesetzt. Acc- Dat aussetzen (危険に曝す)

b. den Täter dem Gericht ausliefern Acc-Dat ausliefern (司直に引き渡す)

c. das Geständnis nur dem Papier anvertrauen Acc- Dat anvertrauen (委ねる)

d. Sie überlässt die Kinder der Fürsorge der Großmutter. Acc- Dat überlassen (まかせる)

e. Er überließ nichts dem Zufall. Acc- Dat überlassen (偶然にまかせる)

f. Sie haben die Stadt dem Feind kampflös überlassen. (敵に明け渡す)

g. Er übertrug sein Vermögen seinem Sohn. Acc- Dat übertragen (譲る)

h. den Häftling dem Gericht überstellen Acc-Dat überstellen (引き渡す)

i. den Dieb der Polizei überantworten Acc-Dat überantworten (引き渡す)

j. das Museum der Öffentlichkeit übergeben Acc-Dat übergeben (に開放する)

- k. den Täter dem Gericht überliefern Acc-Dat überliefern (司直に委ねる)
 l. ein Werk der Nachwelt überliefern Acc-Dat (後世に伝える)
 m. Die Leute haben das Auto einer gründlichen Überprüfung untergezogen.
 Acc-Dat unterziehen. Acc-Dat unterziehen 検査をする
 n. Die meisten Mütter ordnen ihre eigenen Bedürfnisse denen ihrer Kinder unter.
 Acc-Dat unterordnen (子供の欲求に従属させる)
 o. Er ordnet den Beruf der Familie über. Acc-Dat überordnen (上位におく)
 p. j <4> einem Verhör unterwerfen Acc-Dat unterwerfen (審問を受けさせる)
 q. die Wale den Säugtieren zuordnen Acc-Dat zuordnen (組み込む)
 q. Ich ziehe den Peter seinem Bruder vor. Acc-Dat vorziehen (より好む)

上の例で分かるように、無標で対格—与格パターンをとる動詞は、元が空間移動前置詞の不変化詞(aus, über, unter, zu など)をとり、基礎動詞部分が使役移動変化を表わす stellen /ziehen/ordnen /liefern/werfen からなる複合動詞 (分離動詞, 非分離動詞) が多い(cf. Fanselow 2002b)。この場合次のような構造をとると思われる。

(72) 使役主(動作主) - 移動対象(Acc) - 移動目標(方向) (Dat) (空間前置詞)

| _____ ↑ 移動 ↑ _____ | 与格

例えば unterordnen(従属させる)の場合、対格目的語は ordnen (秩序付ける) 動作の対象となり、その対象物が unter +与格名詞句(ある目標の下に)来ることを表わす。これらの動詞は与格—対格の順序ではむしろ容認し難いことを Fanselow (2002b)は指摘している。

- (73) a. er setzt die Kinder der Kälte aus
 he sets the.ACC children.ACC the.DAT coldness out
 b. ?er setzt der Kälte die Kinder aus
 c. er setzt der Kälte die KINDER aus
 "he exposes the children to coldness"
 d. die Kinder werden der Kälte ausgesetzt
 the children are the.DAT coldness exposed-to
 "the children are exposed to the coldness" (Fanselow 2002bの例)

上の例から分かるように、ドイツ語では対格—与格の順序のパターンは与格—対格

パターンと区別されねばならない。前節の議論との関連で言えば、対格—与格パターンはむしろ隠れた対格—前置詞句パターンに相当する複合動詞といえる。

これ以外にも、有生—無生の順序関係に基づく原理や、旧情報—新情報に基づく線形順序などの要因によって、与格—対格パターンが表層で対格—与格パターンに変換される。この場合、基底構造で与格—対格順序が生成され、その後で随意的な移動(scrambling: かきまぜ)によって対格名詞句が左方向へ移動している(右側に痕跡を残す)という分析が生成文法では標準的であった(Stechow & Sternefeld 1988, Haider & Rosengren 1999)。しかし、これについては様々の異論も出され、語順バラエティについての基底生成説も提案されている(Fanselow 1999, Yoshida 2001 etc.)。本稿では、この問題については詳述しないが、すでに見たように、3項動詞は語彙意味論的に2つの意味表示と異なる統語構造をとるので基底語順で与格—対格、対格—与格の可能性がある。他方、語用論的な理由、意味論的な理由による明らかな移動の場合には、かきまぜ操作も除外できないだろう。

2. 4. 日本語の3項動詞の格パターン

次に日本語の3項動詞の格パターンを少し考察する。一見すると3項の場合には問題なく「ガ—ニ—ヲ」順序のパターンで一義的に実現するように見える。事実、日本語統語論においても主格—与格—対格名詞句が基底構造で生成され、それ以外の語順は随意的なかきまぜ移動によるという説明が多くなされている(Saito 1985)。そこでまず、先に見た英語、ドイツ語の制約について日本語の比較を行いながら上の問題を考察していくことにする。

- (74) a. 一郎が友子に本をあげた。 主格—与格—対格
(与える, 渡す, 貸す, 提供する, 見せる)
b. 一郎が友子に手紙を送った。主格—与格—対格 (送る, 発送する)
c. ? 一郎が友子へ本をあげた。
d. 一郎が友子へ手紙を送った。主格—へ(目標)格—対格
e. 一郎がベルリンに(へ)手紙を送った。主格—与格(へ)—対格
f. ? 一郎がベルリンにニュースを見せた。
g. 一郎が本を友子に渡した。 主格—対格—与格
h. 一郎がボートを向こう岸へ渡した 主格—対格—与格(へ)

典型的な授与動詞(「与える, あげる, 渡す, 贈る」など)は、基本的に「主格—与格—対格」パターンを選択する。順序関係は(74g)のように、「対格—与格」の順

序になってもそれほど問題ではないように見える。このような動詞は所有関係の発生を意味するので、(74f)のように目標が所有者ではない場合(単なる目標地点である)は容認されない。また、目標(方向)を表わす「へ」で置き換えることができない(=74c)。それに対して、「送る」タイプの対象物転移を表わす動詞は「ガーヘーヲ」も可能である。つまり、「ガーニーヲ」が成立するが、「ガーヘーヲ」が成り立たないケースは、純粋な所有関係成立の使役型の3項動詞であり、両者が可能な動詞は対象物移動の使役型であると分類テストとして区別できる。

このほか、どのような動詞がこの格パターンを取れるだろうか？

- (75) a. 打者に (へ) ボールを投げた。 ニ (へ) ーヲ 「投げる」
 b. 生徒に正解を教える (見せる)。
 c. 友達に真相を話す(言う/告げる/つぶやく/叫ぶ)
 d. 彼にそのことを約束した。
 e. 友人にプレゼントを持っていった(運んだ)
 f. ??*一郎にボールを押しした (引っ張った)。
 g. 一郎のところに(へ)ボールを押ししていった。
 h. *友人に告白を拒んだ 伝達拒否型

英語・ドイツ語と同様に、發送(転移)タイプ、伝達タイプ、約束のタイプは問題なく、「ガーニーヲ」パターンを取る。一方、日本語では発話様態を示す「つぶやく、叫ぶ」も「ガーニーヲ」と共起する。これは「ニ」格が純粋な与格と同時に、目標を示す"to", "zu"に近い語彙的(前置詞的)意味をもっていることを示唆するのかもしれない。他方、伝達拒否型は日本語ではこのパターンと共起しないが、これは「ニ」が所有と目標到達だけに制限され、目標離脱とは相容れないからであろう。また、「運ぶ」は「ガーニーヲ」と共起するが、「押す」「引っ張る」は英語と同様に二重目的語と共起しない。

若干判断が微妙になるが、「～やる・あげる」と組み合わせた複合動詞の場合では、かなり許容範囲が広がる(cf. 岸本 2001, Shibatani 1994)。

- (76) a. 一郎に弁当を作ってあげた。(一郎に弁当を作った)
 b. 友子にドアを開けたやった。(?*友子にドアを開けた)
 c. 一郎に歌を歌ってやった(??一郎に歌を歌った)

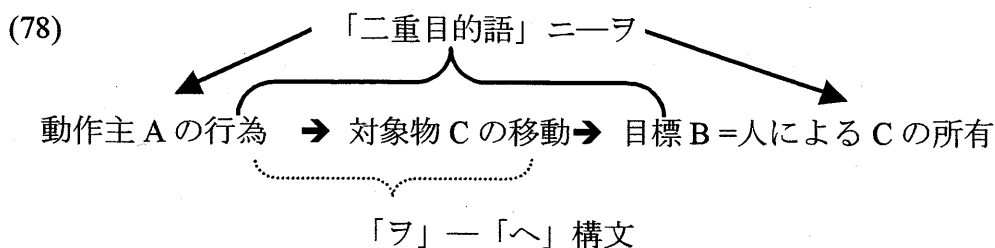
「作成」を表わす動詞の場合は、比較的容易に「ニーヲ」パターンが容認できるが、

それ以外の単純な動作の場合は「やる・あげる」を組み込まなければ「ニーヲ」パターンと共起しない。「sing(歌う)」は、原理的には歌う動作によって作品を作り出す意味を持ちうるが、日本語の「歌う」は動作に焦点を置いているようである。

「ガーへーヲ」パターンは対象物転移の場合に許される。このほか、次のような「ガーヲーニ (へ)」パターンも観察される。

- (77) a. 子供を幼稚園に (へ) 預ける。
 b. 車を玄関に (へ) 回す。
 c. 銃を敵に (へ) 向ける。
 d. 子供を危険にさらす。
 e. 運命を偶然にまかせる。
 f. 先生が学生を助手に紹介した。

これらはドイツ語の「対格—与格」パターンと似ていて、対象移動の使役化が明確である場合であると言えよう。また、対象と目標がどちらも有生であれば、順序はどちらでも容認される(=77f)。このように、日本語では目標(所有者)の部分がかなりの程度で与格の「ニ」に割り当てられる。つまり、「所有」関係が明示的であるならば、目標の「へ」でマークすることは許されないのである(排除関係)。



(※所有関係が明示的である場合は、「ガーニーヲ」だけが使用される)

- (79) a. 与格—対格の意味表示 : A (subject) B (IO) C (DO) Verb
 A=使役主, B=所有者(経験者) C=対象物 (theme)
 $\exists e \exists s [e = \text{CAUSE}(\text{DO}(\text{A}, \text{C}), s) \ \& \ s = \text{HAVE}(\text{B}, \text{C})]$

- (79) b. 「ガーへーヲ」の意味表示 : A (subject) B (IO) C (DO) Verb
 A=使役主, B=目標 C=対象物 (theme)
 $\exists e_1 \exists e_2 [e_1 = \text{CAUSE}(\text{DO}(\text{A}, \text{C}), e_2) \ \& \ e_2 = \text{MOVE-TO}(\text{C}, \text{B})]$
 (「委ねる」など「ガーヲーニ」パターンの一部もこの意味表示になる)

2. 5 ドイツ語・日本語の3項動詞の語順変異

自由語順と関連するドイツ語、日本語の語順変異の制約としては次のような要因が考えられる。つまり、これらの制約は上記の格パタンの配列を上書きして順序を変化させる可能性があるのである。

(80) ドイツ語の構成素の語順制約 (Lenerz 1977)

a. Theme/Rheme Condition: theme (既知要素) >> rheme (未知要素) (普遍的)

b. 定性条件(Definiteness Condition): 定要素 >> 不定要素 (普遍的?)

c. 軽い(短い)要素 > 重い(長い)要素

(意味に関与しない音声レベル=個別言語特有: ドイツ語など)

(cf. „dass es ein Junge einem Mädchen gegeben hat“ = それを少年が娘にあげた)

(81) 日本語の語順の制約 (傾向)

重い長い要素 >> 軽い短い要素 (音声レベル: 個別言語的)

(82) a. お母様の軟らかなきゃしゃなお肩に 手を置いて (太宰治「斜陽」より)

b. 編み棒を 膝に置き・・・(「斜陽」)

ドイツ語では、代名詞や旧情報を担う短い名詞句などの要素が文の左端にかきまぜで移動する傾向がある (これは音韻的な見かけの移動であって、痕跡を残さない移動であるとも考えることもできる。cf. Fanselow 1999, Yoshida 2001)。他方、日本語では左側に移動するのはむしろ、上の例にあるように長い複雑な句であることが多い。これは個別言語的な音韻的制約であると考えられる (あるいは厳密なSOV言語であるために、右側への外置が許されず、解析を容易にするために節が左端に転移されるのかもしれない)。

2. 5. 語順制約の問題点

既に上に見たが、幾つかのパタンが競合するケースがある。

(83) 通常語順が、主格>>与格>>対格ではない (それだけでない) ケース

(84) a. Es hat ein Freund einem Mädchen einen Jungen vorgestellt. NOM>DAT>ACC

a friend-Nom a girl-Dat a boy-Acc introduced

b. Es hat ein Freund einen Jungen einem Mädchen vorgestellt. NOM>ACC>DAT

∴ 「紹介する」タイプは ACC>>DAT, DAT>>ACC (どちらも有生項)

(85) a. Es hat ein Mann ein Kind einem schlechten Einfluss entzogen.

a man-Nom a child-Acc a bad influence-Dat withdrawn

b. % Es hat ein Mann einem schlechten Einfluss entzogen.

(ACC>>DAT ノーマル)

(86) a. Es hat eine Frau einen Mordfall einem Detektiv entzogen.

a woman-Nom a murder case-Acc a detective-Dat withdrawn

b. Es hat eine Frau einem Detektiv einen Mordfall entzogen. (DAT > ACC ノーマル)

(87) animacy condition: +animate >> -animate (有生>>無生)

(88) a. 村田さんが (事務員に助手を/ 助手を事務員に) 紹介した。

b. 女の人を 二階の洋間に 寝かせ・・・(「斜陽」)

(87) NOM >> ACC >> DAT が基本パターンである動詞グループの存在 (前節参照)

(88) a. Es hat ein Polizist einen Zeugen einer Gefahr ausgesetzt. (unmarked)

NOM > ACC > DAT

it has a policeman-Nom a witness-Akk a danger-Dat exposed (証人を危険にさらす)

b. % Es hat ein Polizist einer Gefahr einen Zeugen ausgesetzt. %NOM > DAT > ACC

これらは、前節で分析したように、動詞の語彙意味論的な構造に基づく差異、および有生原理に基づく差異による。動詞タイプで異なる配列がありうるので、すべてに先立つデフォルトの語順というものは前提できない。

次に、語順変異を日本語において考察する(ドイツ語については Yoshida (2001) を参照)。太宰治の小説『斜陽』に出てくる3項動詞を調査したところ、以下のような結果が得られた。以下の分析から分かったが、文献で仮定されているように、デフォルトの「ガーニーヲ」語順は絶対的に多数というわけではない。むしろ、かなりの割合で「ヲーニ」語順も出現することが判明した。ただし後者にはイディオム表現も多く含まれるので生産性は若干低い。

(89) 太宰治 『斜陽』(総数 2720 文)

a) Xに Yを Verb トークン 46例 動詞数 40例

・動詞 → 名詞(を)する: に 恋をする キスをする 相談をする

b) Yを Xに Verb トークン 38例 動詞数 26例

(90) body part (theme vs. goal) or イディオム NP(に/を) [身体/idiom(を/に)+V]

a) Xに(goal) 腰をかける 顔を見せる 手をつく 精を出す 苦勞をかける

b) Yを(theme) 耳にかける ひざに置く 口に押し込む ダシに使う

「顔を 横に向ける」「僕を 恥ずかしい目に 逢わせないで」(「斜陽」)

一つのテキストから一般化はできないが、ニーヲが 46, ヲーニが 38 トークン(総頻度)という対比から、日本語のデフォルト語順は「ガーニーヲ」であることは到底導けないだろう。

ドイツ語に関しては、F. Kafka "Die Verwandlung" (「変身」)およびその日本語訳を用いて格パタンの調査を行った。例えば、以下のような例が見られる。

(91) a. (er) drehte vorsichtig den Kopf dem Bettrand zu (Akk-Dat zudrehen)

b. 用心を重ねて頭をベッドの端のほうに向けてみた

(Akk-Dat mukeru (zudrehen))

(92) a. er habe sich soeben die Sohle verbrannt (DAT(sich)-Akk verbrennen)

b. 彼がかかるとに火傷をして... (Dat Akk suru (machen))

(93) a. Er lag auf seinem panzerartig harten Rücken (auf NP liegen)

b. 硬い甲羅の背中を下にした寝姿だった(Akk Dat suru (machen))!!

日本語で特徴的なことは上の例のように「XをYにする」タイプの使役パターンがかなり頻出し、トークンとしてはドイツ語よりもむしろ「ヲーニ」語順が増える。

しかし、これは基本動詞ではなく統語的な派生であり、かつ、目標の「ニ」部分が機能的であるために(ドイツ語の zu, unter, auf などの前置詞対応!), 明確に意識されないものと思われる。おそらく、基本動詞のレベルでは(授与動詞などのように)「ガーニーヲ」がレキシコンの無標のパターンとして登録されているだろう。

「ヲーニ」タイプの場合は、二名詞句が項というより述部の一部(着点を示す形式名詞と共に述部を形成)をなし、そのために意識されないと考えられる。

2. 6. 結論にかえて

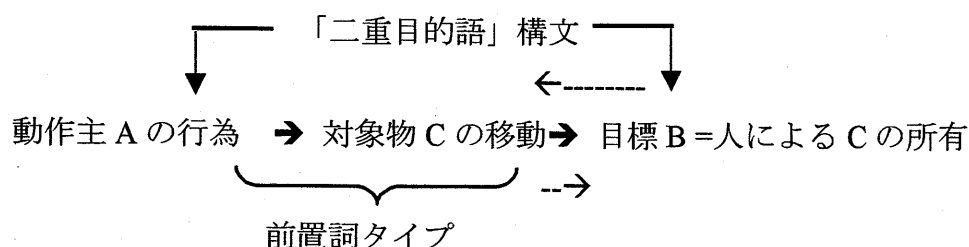
以上、英語・ドイツ語・日本語の3項動詞の格パターンを考察した。冒頭で設定した問題点を再度捉え返せば、英語で問題になった2つの構文パタンの違いは意味論的理由に基づいていた。従って、それは他の言語でも多かれ少なかれ反映されていることが予測される。実際、ドイツ語でも日本語でも所有関係の発生パターンと移動物転移パターンは格関係や語順によって異なった方法で表示される。

英語と、ドイツ語・日本語の相違は、前者の英語では形態格が貧困であるために二重目的語の2つの名詞句の格関係は不安定で、厳しい制約を受ける。他方、形態格が明示的なドイツ語と日本語では与格は非常に生産的な格であり、デフォルトのパターンで与格一対格が優先される。

他方、ドイツ語と日本語を比べると、ドイツ語では方向・場所を示す前置詞の意味が透明であり、複合動詞の形で前置詞句が比較的多く現れる(英語の to NP, for NP と同様の機能をもつ)。他方、日本語で相当する語(後置詞)は「へ」くらいであるが、これは明確に「対象—着点」を示す語彙意味に制限されてしまっている(現代日本語では移動表現の着点は「ニ」で表わされる傾向が強い)。

英語も含めたドイツ語・日本語の3項動詞のスキーマは以下の図になる。

(91) 3項動詞の基本語彙意味の図式



(※英語は、前置詞タイプが右方向に広がる。ドイツ語・日本語は、二重目的語が左方向に拡張する)

そのほか、以下の項目が結論として導き出される。

- (92) 最上位項である使役主(動作主)は、構造格=主格を受け取る。
- (93) (位置変化・状態変化)を受けとる項(主題)も、構造格=対格を受ける。
- (94) 着点・所有者(経験者)は中間格である与格(構造的・語彙的格)を受ける。
- (95) 内項の階層は動詞の語彙意味(意味階層)及び統語構造によって決まる。
- (96) 内項の表層語順は、動詞の語彙意味>有生原理/音韻条件>定性原理で決定される。(OT理論的なランキング。ただし複数の最適語順も可能)

(96)の点に関しては、以下の語順(「斜陽」)では、動詞が「見せる」であることから、「ニーヲ」が予測されるが、主格—対格—与格(人)になっている。

(47)こんなに烈しくお泣きになっているところを 私に見せた。

(音韻>>*語彙意味,*有生)

これは、音韻制約(長い焦点がある要素を前置する)が、語彙意味と有生原理よりも優勢で他を上書きした例だと言える。語順についてのこのような決定原理を動的・総合的に把握するには制約間の上下関係を分析しなければならない。これはしかし今後の課題である。

参考文献

- Abraham, W. (1985) *Erklärende Syntax des Deutschen*. Tübingen: Niemeyer.
- Aoun, J. & A. Li. (1989) Scope and constituency. *Linguistic Inquiry* 20: 141-172.
- Baker, M.C. (1988) *Incorporation*. University of Chicago Press, Chicago.
- Baker, M.C. (2001) *The Atoms of Language*. The Mind's hidden Rules of Grammar. New York: Basic Books. (日本語訳: ベイカー (2003) 「言語のレシピ. 多様性にひそむ普遍性をもとめて」 郡司隆男訳 岩波書店)
- Barss, A. & H. Lasnik. (1986) A note on anaphora and double objects. *Linguistic Inquiry* 17: 347-354.
- Bayer, J. & J. Kornfilt. (1994). *Against scrambling as an instance of Move alpha*. In: N. Corver & H. van Riemsdijk (eds.) *Studies on scrambling*. 17-60. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Behagel, O. (1923-1932) *Deutsche Syntax*. 4 Bände. Heidelberg.
- Bierwisch, M. (1963) *Grammatik des deutschen Verbs*. Berlin: Akademie-Verlag.
- Bresnan J. & J. Kanerva. (1989) Locative Inversion in Chichewa. *Linguistic Inquiry* 20: 1-50.
- Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.
- Chomsky, N. (1986) *Barriers*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, N. (1995a) "Bare Phrase Structure." In: Webelhuth, G. (ed.) *Government and Binding Theory and the Minimalist Program*. Oxford: Blackwell, 383-439.
- Chomsky, N. (1995b) *The Minimalist Program*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, N. (1998) *Minimalist Inquiries: the Framework*. MIT Occasional Papers in Linguistics 15. Cambridge, Mass.: MIT.
- Chomsky, N. (1999) *Derivation by Phase*. MIT Occasional Papers in Linguistics 18. Cambridge, Mass.: MIT.
- Drach, E. (1937) *Grundgedanken zur deutschen Satzlehre*. Frankfurt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.
- Engel, U. (1977) *Syntax der deutschen Gegenwartsprache*. Berlin: Erich Schmidt.
- Fanselow, G. (1987). *Konfigurationsalität*. Tübingen: Narr.
- Fanselow, G. (2001) "Features, Θ -roles, and Free Constituent Order." *Linguistic Inquiry* 32, 405-437.
- Fanselow, G. (2002a). *Quirky subjects and other specifiers*. In: Ingrid Kaufmann & Barbara Stiebels (eds.). *More than Words*. Berlin: Akademie-Verlag.

- Fanselow, G. (2000b) Optimal Exceptions. In: Barbara Stiebels & Dieter Wunderlich (eds.). *The Lexicon in Focus*. Berlin: Akademie-Verlag, 173-209.
- Fukui, N. (1993) "Parameter and optionality in a grammar." *Linguistic Inquiry* 24, 399-420.
- 福井直樹 (2001) 『自然科学としての言語学』大修館書店.
- Fukui, N. & Y. Takano (1998) "Symmetry in Syntax: Merge and Demerge." *Journal of East Asian Linguistics* 7, 27-86.
- Fukui, N. & Y. Takano (2000): "Nominal Structure: An Extension of the Symmetry Principle." In: Svenonius (ed.), 219-254.
- Grewendorf, G. (1988) *Aspekte der deutschen Syntax*. Tübingen: Narr.
- Grewendorf, G. (2002) *Minimalistische Syntax*. Tübingen: A. Francke.
- Grimshaw, J. (1990) *Argument Structure*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Haider, H. & M. Prinzhorn (1986) *Verb Second Phenomena in Germanic Languages*. Dordrecht: Foris.
- Haider, H. (1993) *Deutsche Syntax – generativ*. Tübingen: Narr.
- Haider, H. (2000) "OV is More Basic than VO." In: Svenonius (ed.), 45-67.
- Haider, H. & I. Rosengren. (1998). Scrambling. *Sprache und Pragmatik* 49. Lund: Germanistisches Institut
- Heidolph, K.-E., Flämig, W., Motsch, W. u.a. (1981) *Grundzüge einer deutschen Grammatik*. Berlin: Akademie-Verlag.
- Helbig, G. & Buscha, J. (1974) *Deutsche Grammatik*. Leipzig: VEB.
- Hoberg, U. (1981). *Die Wortstellung in der geschriebenen deutschen Gegenwartssprache*. München: Hueber
- Höhle, T. (1982). Explikation für „normale Betonung" und „normale Wortstellung". In: Werner Abraham (ed.) *Satzglieder im Deutschen*, Tübingen: Narr, 75-153.
- Hoji, H. (1985). *Logical Form Constraints and Configurational Structures in Japanese*. Doctoral dissertation, University of Washington Seattle.
- Inoue, K. (2001): Sentences without nominative subjects in Japanese. Kanda Univ of International Studies.
- Kayne, R. (1994) *The Antisymmetry of Syntax*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 岸本秀樹 (2001) (影山太郎編「日英対照 動詞の意味と構文」, 大修館書店.
- Krämer, S. & E. König (eds.) (2002) *Gibt es eine Sprache hinter dem Sprechen?* Frankfurt a.M.: Suhrkamp.
- Krifka, M. (2001) *Lexical Representations and the Nature of the Dative Alternation*. Ms.

DIP Colloquium, Univ. of Amsterdam.

久野暲 (1973) 「日本文法研究」, 大修館書店.

Larson, R. (1988) On the Double Object Construction, *Linguistic Inquiry* 21, 589-632.

Larson, R. (1990). Double Objects Revisited: Reply to Jackendoff. *Linguistic Inquiry* 21, 589-632.

Lenerz, J. (1977). *Zur Abfolge nominaler Satzglieder im Deutschen*. Tübingen: Narr.

Mater, E. (1971): *Deutsche Verben*. 6. Rektionsarten. VEB (Leipzig).

岡本順治 (2003) 「統語パラメタの限界と還元主義的認知観の問題点」 吉田・岡本編「ドイツ語の統語パラメタを求めて」 65-78.

Pearson, M. (2000) "Two Types of VO Languages." In: Svenonius (ed.), 327-363.

Pesetzky, D. (1995) *Zero Syntax*. Cambridge, Mass.: MIT.

Primus, B. (1999) Rektionsprinzipien. H. Wegener (ed.) *Deutsch kontrastiv*. Tübingen: Staufenburg. 135-170.

Pinker, S. (1989). *Learnability and cognition*. Cambridge, Mass.: MIT.

Ramers, K.H. (2000) *Einführung in die Syntax*. München: Fink.

Rosengren, I. (1993). *Wahlfreiheit mit Konsequenzen - Scrambling, Topikalisierung und FHG im Dienste der Informationsstrukturierung*. In: M. Reis (ed.) *Wortstellung und Informationsstruktur*, 251-312, Tübingen: Niemeyer.

Saito, M. (1985) *Some Asymmetries in Japanese and Their Theoretical Implications*, PhD-dissertation, MIT.

柴谷方良 (1978) 「日本語の分析」 大修館書店.

Shibatani, . (1996): Applicatives and benefactives: A cognitive account. Shibatani, M. & S. Thompson. (eds). *Grammatical Constructions*. New York: Oxford Univ. 157-194.

Stechow, A.v. & W. Sternefeld (1988) *Bausteine syntaktischen Wissens*. Opladen: Westdeutscher Verlag.

Svenonius, P. (2000) (ed.) *The Derivation of VO and OV*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

利根川進 (2001) 『私の脳科学講義』 岩波書店.

竹沢幸一 (1998) 「格の役割と構造」, 研究社.

Travis, Lisa. (1984). *Parameters and Effects of Word Order Variation*. Dissertation, MIT, Cambridge, MA.

Vogel, R. & M. Steinbach (1998): The Dative – an Oblique Case. *Linguistische Berichte* 173, 65-90.

- Webelhuth, Gerd. (1985). *German is configurational*. In: *The Linguistic Review* 4:203-246.
- Wegener, H. (1985). *Der Dativ im heutigen Deutsch*. Tübingen, Narr.
- Wunderlich, D. (1997) *Cause and the structure of verbs*. *Linguistic Inquiry* 28, 27068.
- 米山三明・加賀信弘 (2001) 「語の意味と意味役割」, 研究社.
- 吉田光演(1999) 「ドイツ語の多重WH疑問文の統語的・意味論的考察」 『仲井間憲児還暦記念論集』, 209-250.
- Yoshida, M. (2001) Scrambling in German and Japanese from a Minimalist Point of View. *Linguistic Analysis* 30 /1-2 (2000), 93-126.
- Yoshida, M. (2002) "Zur lexikalischen Bedeutung der japanischen Partikel *ka* - historisch und komparativ." In: JGG (Japanische Gesellschaft für Germanistik) (ed.) *Grammatische Kategorien aus sprachhistorischer und typologischer Perspektive*. München: iudicium Verlag, 220-236.
- Yoshida, M. (2003, im Druck) Externe Argumente und nicht-nominativische Subjekte im Deutschen und Japanischen. In: JGG (ed.) *Dokumentation des 30. Linguisten-Seminars in Kyoto 2002*. München: iudicium Verlag.
- 吉田,保阪,岡本,野村,小川 (2001) 『現代ドイツ言語学入門』大修館書店.
- 吉田, 岡本編 (2003) ドイツ語の統語パラメタを求めて 一多様性を生み出す原理」 日本独文学会研究叢書 19.
- Zifonun, G. et. al. (1997) *Grammatik der deutschen Sprache*. Berlin et al.: de Gruyter.
- Zwart, C.J. (1993) *Dutch Syntax*. PhD-dissertation. Univ. of Groningen.
- Zwart, C.J. & Abraham, W. (2002) *Studies in Comparative Germanic Syntax*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

【コーパス, 辞典, データ等】

Deutsche Welle, Nachrichten.

Spiegel Online.

Wortschatz Deutsch (Universität Leipzig)

Duden Deutsches Universalwörterbuch (Duden Verlag)

PONS Großwörterbuch für Experten und Universität Deutsch-Englisch (Klett)

クラウン独和辞典 (三省堂書店 第3版)

太宰治「斜陽」

F. Kafka 「変身」(日本語訳: 川崎芳隆, 1998, グーテンベルグ 2 1)